

高天神城の総合的研究

まえがき

静岡県小笠郡大東町上土方に所在する国指定史跡高天神城跡にあった城は、中世期に築城され、数多くの戦乱に巻き込まれ、戦国期に廃城となりました。以後歴史の表舞台から姿を消し、城としての幕を閉じました。したがって、詳細な古文書等の資料も少なく、未解明部分の多い城跡でした。

近年、城跡は貴重な文化遺産として、地元の人達に守られ、歴史についても地元郷土史家の方々の努力によって、ある程度明らかにされてきました。しかし、専門家による本格的な調査・研究はおこなわれておらず、未だに不明な点が多く論争の的となっておりました。

この度、静岡大学教育学部教授小和田哲男先生に高天神城の総合的な研究をお願いしたところ、お忙しい中にもかかわらず、快くお引き受け下さり、二年間の資料調査・研究の結果、一冊の書籍として刊行することができました。ここに感謝の意を表するとともに、この書が町民の皆さんの歴史学習に活用され、高天神城研究のさらなる推進と、郷土史をふまえた郷土愛の向上へと役立たせられんことを期待します。

平成五年九月

大東町教育委員会 教育長 青野 行雄

高天神城の総合的研究 目次

第一章	今川氏時代の高天神城と福島氏	7
	今川了俊築城説は誤り	8
	高天神城と土方城は同じか	10
	今川氏重臣福島氏をめぐる謎	15
第二章	小笠原長忠とその時代	23
	小笠原氏のルーツを追って	24
	今川氏重臣としての小笠原氏	27
	小笠原長忠をめぐる謎	29
第三章	第一次高天神城の戦い	33
	徳川家康に降った小笠原長忠	34
	長忠の姉川合戦従軍	37
	元龜二年三月の戦いと高天神衆	39
第四章	第二次高天神城の戦い	49
	三方ヶ原の戦いとその影響	50
	武田勝頼の猛攻	53

開城後の高天神城	59
第五章 武田方城番横田甚五郎と岡部丹波守	67
横田甚五郎尹松の入城	68
岡部丹波守の入城	71
岡部丹波守の人物像	74
第六章 第三次高天神城の戦い	83
孤立する高天神城	84
家康による横須賀城と高天神六砦の築城	87
天正九年三月二十二日の決戦	97
落城後の高天神城	102
第七章 遺構からみた高天神城	107
城の位置と地勢	108
東峯の遺構	111
西峯の遺構	115
〈縄張図集〉	118
〈高天神城関係年表〉	122

第一章 今川氏時代の高天神城と福島氏

今川了俊築城説は誤り

武田・徳川両氏のはげしい攻防戦で知られる高天神城が、すでに、その前段階の今川氏の時代にはじまることは、今日では周知の事実といつてよい。しかし、では、具体的に、今川氏の時代、誰によって、いつ築かれたかということになると、これといった定説のないのが実情である。そこでまず、これまでの諸説を整理する作業からはじめることにしたい。

『高天神御鎮座本記』に、「右大將源頼朝公の御時、土方次郎義政始めて当山に城廓を築く」とある。しかし、頼朝のときといえば鎌倉時代のはじめであり、そのころ、高天神城のような山城はまだ一般的ではなく、仮に土方次郎義政という武士が実在したとしても、高天神城のような山城を築くということはありえない。したがって、これまでの研究においても、土方次郎義政築城説は、ほとんど問題とされてこなかったといつてよい。

それに対し、つぎの今川了俊築城説は、通説というか、定説となっていた。今川了俊築城説の出発点は『高天神軍記』である。同書によると、鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉氏憲（禪秀）の確執に際し、足利持氏を支援した今川了俊が高天神城を築き、山内玄蕃正を城代として置いたとしている。以後、この考え方が、増田又右衛門・増田実父子共編の『高天神城戦史』および、藤田清五郎（鶴南）氏の『高天神の跡を尋ねて』に引き継がれ、通説となつていったのである。『高天神軍記』に、今川了俊が高天神城を築いた年を応永二十三年（一四一六）としており、この説が一般的にはうけいれられていったのである。

もっとも、『高天神城戦史』では、「了俊は讒せられて早く職を罷められたから、同人の築城説を執らぬ者もある。

榛原郡白羽村齊藤氏の高天神記考異には、持氏駿河の今川泰範を頼んだとある。」と述べ、今川了俊築城説に若干矛盾が存在することを示唆している。

実は、高天神城の築城者を考えていく場合、この点がきわめて重大な意味をもっていたのである。いま、『高天神軍記』が、いかなる史料を根拠にして、応永二十三年（一四一六）今川了俊築城説を打ち出したのかはわからないが、通説に対する再検討が必要なときであると考えられる。

そこで、応永二十三年今川了俊築城説が成り立つのか否か、そのころの今川了俊の事蹟を詳細に追いながら、たしかめてみたい。了俊の系譜は、略系図にあらわすとつぎの通りである。



つまり、了俊は駿河・遠江二カ国の守護今川範国の二男であつた。至徳元年（一三八四）から嘉慶二年（一三八八）まで遠江守護となり、また、応永二年（一三九五）から同五年（一三九八）までは駿河半国の守護となっている。しかもその間、幕府の引付頭人に拔擢され、応安四年（建徳二年、一三七二）から、何と二十五年もの長きにわたつて九州探題という要職に任ぜられていたのである。

もともと、九州においてあまりに大きな勢力になったことから、三代將軍足利義満に警戒の念をもたれ、応永二年（一三九五）八月、大内義弘の讒にあつて、九州探題を解任されてしまった。そのかわり、さきにみたように、駿河半国の守護となつたのである。

九州探題の華々しい活躍にくらべ、駿河半国守護はまさに左遷であつた。將軍義満に対する不満の気持ちがつい

には、幕府を打倒しようというグループに接近させていったといつてよい。その後のいきさつについては、『今川記』がくわしいので、関連部分をつぎに引用しておく（以下、史料引用は読み下しにする）。

鎌倉殿も上杉房州頼りに諫め申ける間、大内一味の逆心をひるがへし、京都へ御相談ありけり。其比今川了俊、藤沢に居住して氏満公と一味し、逆心をすすめ申候由、京都へ聞へしかば、忽に誅伐致すべきよし鎌倉へ仰せ付けられしを、甥の泰範は日比争論事有り。了俊とは不快にて有しかども、かゝる事は内親の恨なり。此時いかでこらうべきとて、身命をなげうち、頼に御訴訟申す。了俊父子、其身安穩にて漸々遠州堀越・川合・中村を懸命の地に安堵し、此処にて閑居有り。応永二十七年八月廿八日、九十六歳にて終りけり。海蔵寺殿徳翁了俊居士是なり。

ここに引用した『今川記』では、了俊の没年を応永二十七年（一四二〇）としているが、応永二十五年（一四一八）七月に書かれた正徹の「なぐさめ草」に、「故伊予守入道了俊在世の時」という表現があるので、了俊の死はそれ以前だったことがわかる。

このようにみると、蟄居同然、しかも、死去する直前で九十歳を越えた了俊が高天神城を築くことは考えられない。私は、『高天神軍記』がいう応永二十三年、今川了俊築城説は誤りであると結論づけたい。

高天神城と土方城は同じか

では、高天神城は、いつ、誰によって築かれたのだろうか。その前に、このことと関連して、城名について考察を加えてみたい。というのは、高天神城というよび方とともに、土方城というよび方が存在するからである。高天神城のことを土方城ともよんだのだろうか。あるいは、高天神城と土方城とは全く別な城だったのだろうか。



▲高天神城跡 大手側からの全景

結論からいえば、「同じでもあり、別でもあった」ということになる。このいい方では全く理解してもらえないと思うので、以下、私の仮説的な考え方を提示しておきたい。

ある時期まで、土方城、あるいは、土方館ゆかたという平地の居館があったのではなかろうか。もちろん、それは、現在の高天神城のような高い山の上ではなく、その山麓のどこかにあった。そして、平地の居館である土方城（土方館）の、戦時の詰の城として、規模は小さいが鶴翁山の山上に城が築かれ、二つがセツトになって土方城の名でよばれていたのではなかろうか。つまり、平地の居館が本来の土方城であり、山上の山城部分やまじろは、土方城詰城つめのしろという位置づけである。私が、高天神城と土方城を「同じでもあり、別でもあった」と表現したのはそのためである。

そして、戦国期には、土方城詰城部分、すなわち高天神城の方がもっぱら使われることになり、いつしか、土方城といういい方が消え、高天神城の方が

一般的に使われるようになったのではないかと考えられる。

このように考えると、高天神城の歴史は、平地の居館であつた土方城（土方館）から説き明かしていかなければならないことになる。しかし、土方城の歴史をたどれる史料は皆無に近い。

わずかに、さきにみた「高天神御鎮座本記」に、源頼朝の時代、土方次郎義政がはじめて城を築いたとあるのが注目される程度である。「高天神御鎮座本記」には、「当山に城郭を築く」とあつて、鶴翁山に山城を築いたとしているので、それはまちがいであると述べたわけであるが、平地の土方城（土方館）を築いたとみれば、この伝承は、あるいは真実を伝えているとみてよいのかもしれない。ただ、残念ながら、土方次郎義政という武士のことはよくわからないのである。

鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』の巻第二十一、建保元年（一二二三）五月の項に、「建暦三年五月二日三日合戦討たる人々日記」という記事があり、そこに「ひちかたの次郎」という武士の名前が出てくるが、この「ひちかたの次郎」が、土方城の土方次郎義政と同一人であるとの確証はない。

ちなみに、太田亮氏の『姓氏家系大辞典』には、「土形君 応神天皇の御裔にして、遠江国城飼郡土形郷より起る。」とのみ記し、武蔵の土方氏、丹後の土方氏、清和源氏宇野氏族土方氏、尾張の土方氏についてはくわしく記すが、遠江の土方氏については記載がない。しかし、鎌倉時代、この地に土方氏という武士がいたことは、まずまちがいないのではなからうか。当時の地頭・御家人の標準の大きさである方一町（約一〇九メートル四方）の規模をもつ居館があつたと思われる。今後、高天神山麓における地籍図などによって方形館の発見が求められる。なお、土方字堀之内に「外堀」という屋号のお宅があり、堀之内という地名とともに居館地の可能性を示している。

ところで、その後の高天神城の城主についてであるが、通説的理解となっているのは、さきにも述べたように、

『高天神軍記』に依拠した形の『高天神城戦史』および『高天神の跡を尋ねて』である。

それらによると、今川了俊が築いたあと、城代として入ったのが山内玄蕃正久通だといひ、永享元年（一四二九）まで在城したという。そのあと、文安三年（一四四六）から福島佐渡守基正もとまさが入り、享徳三年（一四五四）、福島基正が鎌倉攻めに出陣するにあたり、再び山内玄蕃正久通が入ったという。

文明三年（一四七一）、福島基正の子上総介正成まさなりが城主となり、永正十七年（一五二〇）、福島正成が甲州で戦死し、それまでの間、一時期、小泉左近が城番となり、さらに、長享元年（一四八七）、浅羽弥九郎幸忠が城代となり、明応五年（一四九六）、浅羽幸忠の没後、小泉左近が再び城番となり、一時期、金沢玄蕃正が城番になったこともあったという。そして、天文五年（一五三六）、小笠原右京進春儀が馬伏塚城から移ってきたとする。以上を整理すると、つぎのようになる。

1、城代山内玄蕃正久通

（応永二十五年～永享元年）

2、城主福島佐渡守基正

（文安三年～享徳三年）

3、城番山内玄蕃正久通

（享徳三年～？）

4、城主福島上総介正成

（文明三年～永正十七年）

5、城番小泉左近

(? ? ?)

6、城代浅羽弥九郎幸忠

(長享元年～明応五年)

7、城番・城代小泉左近

(明応五年～?)

8、城番金沢玄蕃正

(? ? ?)

9、城主小笠原右京進春儀

(天文五年～天文十一年)

以下、小笠原氏が氏清・長忠と世襲したとするのである。

私は、この通説となっている城主歴代には疑問をもっている。というのは、さきに検討したように、『高天神軍記』がいう今川了俊築城説が否定されるとしたら、同書が記すその後の歴代城主も、そのままには信用できないのではないかと考えるからである。

たしかに、ここに見える人物の何人かは古文書にもみえ、実在の人物であったことがわかる。高天神城周辺に何らかの形でつながりをもっていた領主であった可能性はある。しかし、高天神城周辺に所領をもっていたからといって、即領主であると断定はできないのではなからうか。『高天神軍記』を全面的に信用してしまうのは危険といわなければならない。私は、本報告において、これまでの通説を疑いながら、『高天神軍記』を離れたところから研究をスタートさせたいと考えている。

信憑性の高い史料によるかぎり、高天神城の城主として名前がはっきりしてくるのは福島氏からである。しかし、その福島氏についても、調べて行けば行くほど謎につつまれている。ここでは、結論を急がず、矛盾点などもあらわさらい提示しながら、私自信の研究過程をさらしてみたい。

今川氏重臣福島氏をめぐる謎

今川義忠・氏親の時代、今川氏の重臣に福島氏という部将がいたことは確実である。たとえば、『いんりょうけんにちりく藤涼軒日録』の寛正六年（一四六五）四月十四日条に、

……雲頂院領駿河国賀島庄、今川殿被官人違乱有り、仍って、御教書を成され、違乱を止むべきの事。

とあり、「今川殿」というのは今川義忠のこと、「被官人」とあるだけであるが、これが前後の文章から福島修理進をさしていることが確実である。『藤涼軒日録』には、そのあと同年十二月六日条にも清見寺領押領のことがみえている。このことから、今川義忠の重臣に福島修理進という部将がいたことは明らかであるが、この福島修理進が高天神城にいたとか、高天神城を築いたという史料はない。

では、そもそも福島氏とは、いかなる系譜をもつ武士だったのだろうか。前述『高天神の跡を尋ねて』には、「福島氏は別に九島とも称した。清和源氏、頼国の後裔で、馬場氏の流れ、摂津西成郡福島庄に住んだ氏盛が福島と称し、その裔、駿河の今川氏に仕えたのが始まりである。基正は善九郎、左衛門太夫とも称した。」と記されている。仮に、この福島佐渡守基正が修理進という官途名を名乗っていたとすれば、時代としては一致することになる。

太田亮氏の『姓氏家系大辞典』によると、

福島系図に「源姓、家紋篠龍膽、或いは桔梗。頼光云々、国氏（山懸六郎二郎藏人）―国親（福島三郎）―国基（福島五郎）―基宗（左近将監、藏人）―基仲（五郎）―基成（六郎）―親成（左衛門大夫）―繁成（九郎、左衛門大夫）―基正（左衛門大夫、善九郎）―正成（上総介、遠州土方城主）―綱成（北条左衛門大夫、後号上総介）とあり、また、

遠江の福島氏、土方城主に福島上総介正成あり。大永元年、駿遠の甲士一万五千余騎を率ゐ、甲州に発向し、武田信虎と飯田川原に戦つて討死す。院号玉仙、法名華岳。甲州身延鏡に「大永中、福島上総乱入の時、波木井三河守義実之に常するに因りて、武田信虎の為に、峰の城に於いて責殺さる」とあるも、正成の事也。又当国発祥江戸幕臣福島氏は、正成と同様、清和源氏頼光流と云へど、一に藤原氏とも伝ふ。寛政系譜は清和源氏に収め、今川義元家臣「福島織部為基―織部為忠（家康に仕ふ）―九藏為重―太郎左衛門為信（二百石）」など見ゆ。家紋花輪遠、三鱗。又一に村上源氏と伝へ、又當国福島氏は一に久島氏とも称し、福島氏盛の御裔正常に至り、久島に改むと云ふ。高天神城主久島上総（福島とも）は即ち正成の事也。又天文中久島左衛門あり。

とみえる。いわば、これが福島氏についての系譜的概略ということになる。

ところで、福島氏をめぐる謎の一つは、こうした系譜類と、たしかな古文書・古記録に出てくる人名とが一致しないという点である。さきに、『蔭涼軒日録』に福島修理進という今川義忠の重臣の名がみえることを紹介したが、系譜類に修理進という官途名はみえない。

また、福島氏関係の古文書を大量に所蔵している三カ日町の大福寺文書（『静岡県史料』第五輯所収）では、福島玄蕃允範能（永正四年十月二十八日付）

福島左近将監春能（年不詳正月六日付）

福島氏春（年不詳正月六日付）

福島左衛門尉助春（年不詳八月二十一日付）

福島十郎左衛門助昌（年不詳七月三日付）

といった福島氏の人間を検出できるが、これらの人名・官途名と、さきの系譜類から検出される人名・官途名と全く一致してこないのである。これはどういうことであろうか。

ただ、この大福寺文書の中に一点、注目すべき文書がある。長文であるが、大事な文書と思われるので、全文引用しておこう。

御状委細拝見申し候。仍つて浜名の大福寺中の替わり、寺号ならびに北原と申す在所、御寄進の由承り候。彼の在所の儀、二百年・三百年の内寺領に罷り成り候事なき由申候えども、上様より御判を成され候由、仰を蒙り候間、是非に及ばず渡し申し候。この旨御披露に預かるべく候。はたまた、社家方の事、度々申し入れ候ごとく、權太方長者より御百姓一人召し置き、鍵責を以つて催促候。然れども、豆州より御意の由候間、兎角に及ばず候。早々一途仰せ付けられ候はば、然るべく存じ候。恐々謹言。

八月廿一日

彈正忠憲光

謹上福島左衛門尉殿

田原彈正より高天神への

返状案模し置く。

この文書は、三河の田原城主戸田彈正忠憲光から福島左衛門尉助春に宛てたものである。この文書で注目されるのは、一番最後の部分で、原文は「自田原彈正高天神返状安模置」となっており、『静岡県史料』の編者はこれに「自

二田原彈正高天神「返状安模置」と返り点をつけているが、これでは、戸田憲光が高天神城にいたことになる。しかし、戸田憲光は田原城主であって、この時期、遠江の高天神城に居城していたことはありえない。となると、返り点は「自二田原彈正高天神返状安模置」とつけるべきであろう。そして、このように読めば、当時、高天神城にいたのが福島左衛門尉助春だったことがわかる。これが、たしかな文書によって、高天神城の城主を推定していく、まず第一番目の手がかりであった。

ただ、残念なことに、この文書、書状であるため、年号の記載がなく、福島左衛門尉助春が高天神城に在城していたのがいつのことであるのかわからない。しかし、田原城主戸田憲光は、永正十年（一五二三）十一月一日に没しているのも、それ以前の文書であることは確実である。

私は、山城としての高天神城は、今川氏親の時代に築かれたと考えている。実際に築城にたずさわったのは福島氏かもしれないし、そうでないかもしれない。もし、福島氏だったとすれば、福島左衛門尉助春だった可能性が濃厚である。築城時期は、氏親が叔父にあたる北条早雲の支援を得て、中遠、殿谷城（別名高藤城、掛川市本郷中殿谷）の原氏を攻めているのが明応三年（一四九四）なので、そのころではなからうか。遅くとも、同六年（一四九七）、原氏が滅ばされ、中遠の武士が今川氏の麾下に入ったころまでには高天神城は築かれていたはずである。

さて、福島氏をめぐるもう一つの謎は、大永元年（一五二一）、甲斐飯田河原の戦いにかかわるものである。

通説では、この年、今川氏親が高天神城主福島兵庫頭正成を総大将とし、一万五〇〇〇の兵を預け、甲斐の武田信虎を攻めさせた。ところが、正成は十一月二十三日の飯田河原の戦いで負けてしまい、正成の遺児綱成は小田原に逃げ、北条氏政を頼ったという。のち、氏政は娘の一人をこの福島綱成と結婚させ、北条と改め、北条綱成になったというのである。

たしかに、『関八州古戦録』によると、福島兵庫頭正成という部将が今川義忠の家臣だったとしている。しかし、同書では、飯田河原の戦いがあった大永元年の時点では高天神の城主ではなく、義忠死後、駿河国駿東郡に蟄居していたという。ちなみに、『関八州古戦録』によると、『遠州土方の城主』と表現しているので、山上の高天神城はまだ築かれておらず、籠の居館である土方城の方にいたのかもしれない。

この考え方によると、今川義忠死後におきた内訌で、福島正成は、義忠の遺児龍王丸すなわち氏親擁立派ではなく、反対派である小鹿新五郎範満派に属していたようである。そのため、氏親が家督をついだあと、駿東郡に蟄居していたのかもしれない。

となると、大永元年、福島正成が一万五〇〇〇の兵を率いて甲斐に攻め込んだのは、今川氏親の正規軍ではなかったということになる。事実、『関八州古戦録』は、『甲斐ノ国ヲ伐散ジテ自立セントノ志ヲ發シ、旧知ノ諸士ヲ相語フニ、凡^{およそ}一万五千人一味同心シタリケレバ、去ラバトテ、大永元年十月中旬、富士ノ根方川内通りヨリ、甲州山梨郡へ押入、陣ヲ取敷テ乱妨ヲナス。』と記し、そのあたりのニュアンスをおわせている。正成の遺児が氏親のもとで成長するのではなく、他国へ逃げていったというのも、そのことを考えれば納得がいく。

ところで、今川氏親の時代、この福島正成とは別の福島氏がいた。それは、さきにみたように、福島左衛門尉助春であるが、実は、さらに別な人物も存在した。これが、福島氏をめぐる三つ目の謎である。

今川氏親の正室は京都の公家中御門宣胤^{のちのちのち}の娘であるが、側室もあり、その一人が福島氏の娘であった。ただ、各種系図・家譜によって官途・受領名に異同がある。わかりやすく整理しておこう。

『寛政重修諸家譜』の今川系図では、今川義元の兄玄広^{げんこう}恵探^{えたん}のところに、「母は福島氏」とあるだけなので、具体的なことはわからない。『系図纂要』所収の今川系図では、「母福島安房守女」としており、『統群書類従』所収の今



▲高天神城跡 搦手側からの全景

川系図でも「母は福島安房守女」としている。

ところが、『今川記』所収の系図では「母、福島左衛門女」としているのである。左衛門は左衛門尉と同じとみてよいので、今川氏親の重臣に、福島安房守と、福島左衛門尉の二人がいたことがわかる。そして、さきにみたように、この福島左衛門尉というのは、高天神城在城が確認された福島左衛門尉助春と同一人であろう。

どの系図にも、福島安房守の名乗りはみえない。これはあくまで推測の域を出ないが、もしかしたら、福島安房守と福島左衛門尉は同一人かもしれない。一代の間に官途・受領名が変わることは、当時是一般的で、左衛門尉だったものが、あるときから安房守を名乗るようになった可能性はある。

この福島安房守ないし左衛門尉の娘が今川氏親の側室となり、氏親の子を生んだ。これが玄広惠探である。その名前が示す通り、僧侶となり、花倉（藤枝市花倉）の遍照光寺（遍照光院）の住持となって

いた。

そのままであれば、どうということとはなかったが、天文五年（一五三六）、氏親の長男氏輝、二男彦五郎が死んでしまったのである。家督は寺に入れられていた三男の玄広惠探、四男の象耳泉契しやうじせんしやう、五男の梅岳承芳ばいがくしやうほうの三人のなかから選ばれることになった。この三人の中、四男の象耳泉契は家督争いレースに名乗りをあげず、早々に降りてしまったので、その結果、側室福島氏の生んだ玄広惠探と、正室寿桂尼の生んだ梅岳承芳によって争われることになった。これが有名な花倉の乱である。

玄広惠探が家督をつぐようなことになれば、外戚として、福島安房守ないし左衛門尉の力が大きくなる。他の家臣たちはそのことを警戒し、結局、正室寿桂尼の生んだ梅岳承芳の側に人が多く集まり、勝利をおさめている。梅岳承芳が還俗して今川義元となったのである。

そして、この花倉の乱の結果、福島氏は没落していくのである。当然、高天神城主も罷免されたであろう。代わって、高天神城の城主となってきたのが小笠原氏であった。

第二章 小笠原長忠とその時代

小笠原氏のルーツを追って

高天神城の城主といえば、小笠原与八郎長忠の名前が有名である。そこで、つぎに、小笠原氏と高天神城のかかわりについてみていくことにしよう。

江戸時代、長忠の叔父にあたる義頼の子孫が幕臣となり、中奥なかおくの小姓とか、西の丸御書院の番頭などをとめており、その家の系譜が『寛政重修諸家譜』巻第二百四十一に収められている。後で述べるように、問題点がないわけではないが、高天神城主小笠原氏をみていく上では不可欠の史料なので、まず、その系譜からみていきたい。

『寛政重修諸家譜』では、長忠の曾祖父にあたる長高から記述がはじまっているが、それより以前の系譜部分については、つぎのような叙述となっている。

家伝に、信濃守長高は、小笠原修理大夫貞朝が長男なり。長高五歳の時母死せしにより、父貞朝ふた、び海野弥太郎幸高が女を娶りて信濃守長棟を生り。継母長棟をして家を繼しめむと欲し、長高を父に譲るにより、父子不和となり、長高つみに信濃国を去て尾張国にいたるといふ。按ずるに貞朝・長棟は旧家清和源氏義光流小笠原右近将監忠苗が家代々正統の祖なり。しかるに、彼系図に所見なきにより、忠苗が家にたづめるのところ、古系図に貞朝が男長高なるものたえてみるところなしとこたふ。これによれば、家伝うたがはしといへども、しばらく其よしをこゝにするす。

ここに、「家伝うたがはしといへども……」とあるように、長高が信濃守護の嫡流である小笠原貞朝の長男だったという点については確証はない。

ちなみに、小笠原氏は、甲斐源氏の加賀美遠光の二男長清が、甲斐国中巨摩郡小笠原村（現在、山梨県中巨摩郡檜形町）に拠り、その土地の名をとって小笠原氏を称したのにまじまるという。以後、長清―長経―長忠―長政―長氏―宗長―貞宗―政長―長基と続くが、長清・長経父子の時代はちやうど源頼朝が挙兵したときで、頼朝に従って各地で戦功をあげている。政長のころが、元弘・建武の争乱期で、政長は足利尊氏に従って戦功をあげ、信濃守護となり、伊那郡の松尾に居城していた。

長基の子長秀と政康兄弟のとき二家に分裂し、長秀が深志（現在、松本市）に移り、深志小笠原となり、政康がそのまま松尾にとどまり、松尾小笠原となった。そして、長秀―持長―清宗―長朝―貞朝と相ついでわけである。深志小笠原の系図では貞朝の子としてあとをついだ長棟と定政・統最・長利の四人の男子しかあげておらず、『寛政重修諸家譜』巻第二百四十一が伝えるように、長高という男子がいたかどうか疑問である。

さて、『寛政重修諸家譜』によると、継母の讒言によつて信濃を逐われた小笠原長高は、尾張に至り、斯波氏を頼り、ついで三河国の幡豆はづに行つて吉良義堯よしたかを頼つたという。そして、そののち、今川氏親に属し、遠江国の浅羽荘を領し、馬伏塚城に居城したことになる。

実は、このあたりの経歴については、他に傍証できる史料がなく、たしかなことは不明というしかない。信濃出奔の経緯といい、今川氏に仕えるようになる経過もどことなく不自然で、小笠原という苗字を、強引に信濃の小笠原に結びつけようとした結果とみれなくもない。系図にはそのような例がかなり多いのである。見崎関雄氏は、『古城を尋ねて』遠州高天神城』において、今川氏親が、奉公衆だった小笠原氏を京都から招いたのではないかと推定している。卓見である。

『寛政重修諸家譜』の小笠原系譜によると、長高のあとをついだのは春義はるよとなっており、その注記につきのように

みえる。

父が家を継、大永元年高天神の城主福島上総介正成、今川氏親に叛くるとき、氏親の命をうけてこれを討。その勳賞として高天神を属せられ、彼城にうつり住す。

同書によれば、春義は長氏と称したこともあり、幼名豊千代、仮名は彦太郎および与八郎で、官途を左京進および左京大夫と称したという。また、他の史料からは春儀（せうぎ）という名乗りもみえ、華嚴院文書（『静岡県史料』第四輯所収）の天文十一年（一五四二）十月二十六日付の寄進状の差出者は小笠原右京進春茂となっていて、正しくは春茂だったことがうかがわれる。官途も系譜にみえる左京進ではなく、右京進だった可能性がある。

この華嚴院文書によって、少なくとも天文十一年時点において、小笠原春茂＝春儀＝春義が高天神城の城主となっていたことが明らかとなったわけであるが、それは、『寛政重修諸家譜』が伝えるように、大永元年（一五二一）のことだったのだろうか。

さきに引用した小笠原系譜で、大永元年に高天神城々主福島上総介正成が今川氏親に謀反をおこしたとき、氏親の命で小笠原春義がそれを退治したと出てきたが、これは明らかに史実と矛盾している。

この点は、第一章の「今川氏時代の高天神城と福島氏」のところでもみたように、大永元年の事件と、天文五年の事件をごっちゃにしており、明らかにまちがいである。春茂（＝春義＝春儀）の高天神城入りは、天文五年の花倉の乱後ではなからうか。

人名についてはそのままに信用できないが、動きそのものとしては事実に近いのではないかと思われる記述が『北条記』巻六（『統群書類従』第二十一輯上）にある。すなわち、

相州甘縄の城主北条常陸守氏重（しげ）は、上総介綱重（つな）が一男也。綱重は駿河今川殿近臣、本国美濃源氏なり。中比より

遠州へ下り、福島上総介親成とて、高天神の城主也。其比、今川氏輝薨去有て、御弟二人有。一人は花倉殿、今一人は善徳寺殿。此兄弟二人、兄の氏輝の跡を争ひ給ふ。福島上総介は花倉殿母方の伯父なれば、花倉方にて、花倉殿自害有しかば、福島一党没落して……。

とみえるもので、花倉の乱の結果、高天神城の城主だった福島氏が没落し、そのあとに小笠原氏が入ったことがわかる。このようにみれば、さきの、華嚴院文書の天文十一年という年次とも矛盾しない。

今川氏重臣として的小笠原氏

以上みてきたように、小笠原氏がなぜ今川氏の家臣になったのかといった肝心の部分で不明な箇所もあるが、長高のときに今川氏親に仕えるようになったとみてよいと思われる。その庶流家にあたる小笠原安房守政恒家の呈譜によれば、はじめは、三輪・岡崎・横須賀・浅羽莊を所領として与えられたという。したがって、開発領主的な在地領主ではなく、他所から迎えられて新しく領主として入りこんだ者であったことがわかる。

そして、『寛政重修諸家譜』によると、小笠原長高が入った城が馬伏塚城（静岡県磐田郡浅羽町岡山）だということ。このことは、『寛政重修諸家譜』にしかみえないことなので、どこまで信用してよいのかわからないが、これを否定する史料もないので、ここでは、その通りに理解しておくことにしたい。

長高自身はそのまま馬伏塚城主として一生を終え、子の春茂（『春儀』春義）のときに、さきにみたように、天文五年（一五三六）の花倉の乱後、高天神城主だった福島氏が没落したあとをうけて高天神城主となったのである。伝えられるように、馬伏塚城主と兼ねていた可能性はある。

『寛政重修諸家譜』小笠原系譜によると、春茂のあとをついだのが、その子氏清（『氏興』）である。同書には、氏清が春茂の子であるという書き方はしていないが、春茂のところの注記に「妻は今川上総介氏親が女」とあり、氏清のところの注記に「母は氏親が女」とあることから、父子関係とみてきた。

なお、この氏清の名乗りも、たしかな文書には氏興とあるので、ここでは氏興で統一しておきたい。そのたしかな文書というのは、つぎに掲げる華嚴院文書（『静岡県史料』第四輯所収）である。

土方上郷日南多谷門前立切の内五段、親にて候者寄進申され候。残して二段、月窓月忌として寄附申し候上は、末代他の繕有るべからず候。後日のため一札進らせ置候者也。仍つて件の如し。

天文十三年^{庚申}七月一日 氏興（花押）

日南多谷

花嚴院

この文書によって、天文十三年（一五四四）の時点における高天神城主は小笠原氏興であったことがわかる。なお、『寛政重修諸家譜』によると、「遠江国城東・榛原・山名・敷智四郡を領し、馬伏塚及び高天神の城主なり。」とあって、城東・榛原・山名・敷智の四郡すべてを所領としていたかのごとき印象をうけるが、実際は四郡のすべてではなく、四郡の中に所領を与えられていたと解するのが正しい。ただし、その所領がどこであったのか、また、全体で何貫文に及んでいたかはわからない。

しかし、高天神城は、今川氏にとって遠江支配の要の城であり、小笠原氏興は今川氏の重臣として位置づけられていたことが確実である。

今川氏の家臣団構成は、寄親寄子制を基本にしていた。寄親というのは、小笠原氏興のような支城主がなった。そ

の下に寄子が付属させられていたのである。寄子は兵農未分離状況の、「武士でもあり、農民でもある」という土豪すなわち地侍であった。あとで、高天神城をめぐる攻防戦についてくわしくふれるが、そこで名前の出てくる武士のほとんどはこの寄子であった。

寄親も寄子も、戦国大名にとっては、どちらも家臣である。寄子を戦国大名が個々につかむことはできないので、それぞれの地域の中心的な城の城主である寄親の指揮下に入れたものである。

今川氏の場合、一人の寄親に五〇人ぐらいの寄子がつく。一人の寄子が、「いざ戦い」というときにはそれぞれ一〇人ぐらいの兵を率きつれて参陣するので、一人の寄親のもとに大体五〇〇人ぐらいの兵が集まっていた計算になる。高天神城の場合もそのくらいで、同じような支城が今川氏の全盛期には二五から三〇ぐらいあったのである。

こうした支城主、すなわち寄親は、駿府にも屋敷を与えられ、評定衆として、訴訟のみならず政務にも携っていたのである。小笠原氏興の屋敷が駿府にあったことを示す史料は残念ながらないが、駿府今川館のまわりには重臣屋敷があったので、その中の一つに小笠原氏興邸もあったはずである。

今川氏の御用商人として知られる松木氏関係の文書である矢入文書（『静岡県史料』第五輯）に、永禄九年（一五六六）九月三日付の小笠原氏興田地売渡証文が収められており、小笠原氏興の駿府生活の一端を示している。

小笠原長忠をめぐって

今川氏時代、高天神城の最後の城主となるのが小笠原長忠である。この長忠も、名乗りについては諸説あり、『寛政重修諸家譜』は氏助とし、注記に「初氏義」とするのみで、長忠とよばれたことは記していない。しかし、高天神

城の攻防戦を記す史料は長忠とするものが多く、ここでは、長忠という名乗りで統一しておくことにしたい。

なお、たしかな古文書には信興と出てくる。ただ、信興と署名した文書は、いずれも天正二年（一五七四）六月、長忠が高天神城を開城し、武田勝頼に降ってから発給した文書に限られているので、伝えられるように、武田方になったあと改名したもののかもしれない。

仮名の与八郎という名前はよく知られ、各種軍記物にも「小笠原与八郎」という形で出てくる。『寛政重修諸家譜』では、「与八郎、彈正忠^{正少弼が字}と出づ」としているが、たしかに、天正二年七月二十七日付の華嚴院文書では「彈正小弼信興」と署名しており、官途名が彈正少弼だったことがわかる。

ところで、長忠が高天神城の城主になったのはいつのことなのだろうか。これについては、増田又右衛門・実父子の『高天神城戦史』と、藤田清五郎氏の『高天神の跡を尋ねて』とでは意見の対立がある。

具体的にみると、『高天神城戦史』では、「氏清死して其の子小笠原与八郎長忠城主となった。」としているのに対し、『高天神の跡を尋ねて』では、「永禄七年高天神城主を嫡男長忠に譲って馬伏塚に在城して長忠の後見役をした。」としている。つまり、氏清、すなわち氏興が、生前に家督を子の長忠に譲ったとみるのか、氏清、すなわち氏興の死後、子の長忠が家督をついだとみるのか、意見が分かれているのである。

たしかないことはわからないが、おそらく、増田説の根拠になったのは『寛政重修諸家譜』であろう。氏清の経歴を記したあと、氏助、すなわち長忠のころのトップに「家を継、高天神の城に住す。」とあることから、死後の家督相続と判断したものと思われる。

⑥ いっぽう、藤田説の根拠になったのは『高天神軍記』である。そこに、「永禄七^七年、長忠城主となり、小笠原美濃守は馬伏塚に在城す。」とあったのがもたっている。

したがって、永禄七年説か同十二年説かは、『高天神軍記』と『寛政重修諸家譜』のどちらが信憑性が高いにかかっているといえよう。ただ、私自身は、『高天神軍記』も『寛政重修諸家譜』も、史料としての信憑性はどちらもあまり高いものではないとみており、この二つの史料だけで、どちらかに軍配をあげるのはむずかしいとみている。早ければ、『高天神軍記』のいう永禄七年、遅くとも、『寛政重修諸家譜』のいう永禄十二年には、長忠が高天神城主になっていたというのが妥当なのではなからうか。

第三章 第一次高天神城の戦い

徳川家康に降った小笠原長忠

永禄三年（一五六〇）五月十九日の桶狭間の戦いで、今川義元が織田信長に討たれた。この日を境にして、戦国大名今川氏の衰退がはじまるのである。

まず、三河の松平元康（のちの徳川家康）が、義元の家督をついだ今川氏真の手を放れて自立する動きをみせはじめた。氏真は何とかこれを押さえようとしたができず、結局、永禄七年（一五六四）までに、三河は完全に徳川領となってしまった。

そうした動きと前後して、遠江においても今川氏の重臣たちの動揺がはじまっていた。特に遠江の場合は、北から武田信玄の手が伸びてきており、西から家康の手が伸びていた。信濃に接する北遠の天野景貞らはいち早く信玄につき、三河と接する井伊谷城の井伊直親、引馬城の飯尾連龍は家康につく動きをしたため、氏真によって滅ぼされている。こうした動きを氏真自身「遠州念劇」と表現しているが、戦国大名今川氏としては存亡の瀬戸際に立たされたことになる。

では、高天神城の小笠原氏興・長忠父子のもとには、誰から、どのようなはたらきかけがなされていたのだろうか。今回、いろいろと史料を調べた中で、年代的に一番早い時期としているのは、『田原近郷聞書』（『豊橋市史』第五巻所収）という史料である。そこには、

永禄八年十二月、家康公三州幅豆郡ノ小笠原新九郎安元ヲ召テ、遠州高天神ノ小笠原与八郎長忠ヲ御幕下へ来ラシム。安元ガ此ノ功ヲ悦ビ給ヒテ、三州赤羽根・芦・赤沢三ヶ邑ヲ安元ニ給ルト。

と記されており、早くも永禄八年（一五六五）の時点で家康が小笠原長忠に誘いかけをしたとしている。

しかし、永禄八年とするのは、この『田原近郷聞書』だけであり、年次の部分に誤まりがあるのではないかと考えられる。

そこで、史料としての信憑性も考えながら、私自身が注目するのは『浜松御在城記』（『浜松市史』史料編一所収）のつぎの部分である。

一、辰ノ十二月、小笠原新九郎（正統御方）、仰セ付ケラレ、遠州馬伏塚ノ小笠原与八郎長忠方（正）遣ワサレ候。此与八郎ハ、原・小笠原トテ、其以前、遠州城東郡ヲ兩人シテ領知仕リ候。近代、原ハ絶テ、小笠原計リ罷リ成リ、殊ニ今川縁者也。威勢之有ル處ニ、氏真ノ弱ヲ見テ、秋山方（正）人質ヲ出シ、甲州（正）降参仕ル可シト支度ノ處（正）、新九郎、理ヲ盡テ異見申、御味方ニナシ、新九郎同道ニテ伺公。御礼申上候。

冒頭、「辰ノ十二月」とあるのは、永禄十一年戊辰十二月のことで、家康から小笠原長忠への誘いかけが、文字通り、今川氏滅亡の前夜だったことがわかる。信玄が大軍を率いて甲斐から駿河に侵入し、家康が大軍を率いて三河から遠江に侵入したのが、ともに永禄十一年（一五六八）十二月のことだったからである。

ここで興味深いのは、小笠原長忠が、家康方に寝返る前に、武田信玄の重臣秋山信友を通し、武田方に寝返る約束をしていたという点である。人質まで差し出す用意をしていたところをみれば、話はかなり具体化していた様子がかがわれる。遠江における今川氏の家臣たちが、すんなり家康になびいていったわけではなかったことを物語っている。

なお、氏興・長忠父子に対し、家康につくことを勧めたのは、小笠原新九郎安元だけではなかった。『寛政重修諸家譜』によると、もう一人小笠原与左衛門清有がかかわっていた。清有は春茂の弟宗長の子である。小笠原系譜の清

有のところに、「永禄十一年おほせをうけたまはりて、高天神の城におもむき、一族美作守氏興をよび其弟右京進茂頼・惣兵衛清広を御味方に属せしむ。これにより四月九日、同族河内守某、勾坂加賀守某と三人連名の御感状をたまひ、十二年正月二十日、遠江国棚草・大坂・西戸・浜野・善能寺領等に於て、総て四百三十貫文余の地を宛行はる、の旨御判物を下さる。」とある。これによれば、氏興・長忠父子が家康に降つたのは永禄十一年の四月以前ということになる。

今川氏真が武田信玄によって駿府今川館を逐われたのは、永禄十一年十二月十三日のことであつた。信玄と家康が相談し、今川領国に同時進攻をはかつたのである。

このとき、氏真は今川館の詰の城である賤機山城に籠つて一戦を交じえることなく、そのまま遠江の掛川城に走つた。掛川城に、今川氏の重臣ナンバーワン朝比奈泰朝がいたからである。十二月十五日には掛川城に逃げこんでいたらしい。

ところが、その掛川城が家康によって囲まれてしまつたのである。家康軍が掛川城を包囲したのはその年の十二月二十七日からといわれている。

具体的に戦いとなつたのは翌永禄十二年（一五六九）一月十二日からで、この日から五月十七日まで、はげしい攻防戦がくりひろげられることになった。その攻める徳川軍の中に、寝返つたばかりの小笠原氏興・長忠父子の姿があつた。

当時、このように、寝返つたばかりの武将が先鋒に立たされるのは一般的だつた。寝返つたばかりのため、敵の内情に通じているということも理由の一つであつたが、それ以上に、「寝返りが本物かどうか」という、いわば忠誠度を試される場ともなつていたからである。おそらく、氏興・長忠父子は、家康に認めてもらおうと、一生懸命働いた

であろう。氏真が降服したのが五月十七日であるが、その直後の六月十一日、氏興は没している。

長忠の姉川合戦従軍

徳川家康の一部将となった小笠原長忠および高天神衆の活躍した戦いとしてよく知られているのが、元亀元年（一五七〇）六月二十八日の近江姉川の戦いである。高天神城主小笠原長忠が、なぜ、わざわざ近江にまで戦いに行かねばならなかったのかについては、若干の説明が必要かもしれない。

実は、その年四月、織田信長が越前の朝倉義景を攻めようとして朝倉領内に足を踏み入れたところ、信長の妹お市の方を娶り、信長と同盟を結んでいたはずの近江の浅井長政が突然反旗をひるがえたのである。そのとき、信長はほうほうの態で京都に逃げもどったが、態勢を整えて、あらためて浅井長政討伐の軍をおこした。そのとき、信長から家康に対し、援軍の要請があったというわけである。

信長二万、家康五〇〇〇、合わせて二万五〇〇〇の大軍で近江に進み、それに対し、浅井長政は、朝倉義景からの援軍を得て、およそ一万五〇〇〇の大軍を率いて出てきた。結局、六月二十八日、姉川をはさんで戦いとなった。

このとき、家康の第一陣が酒井忠次隊で第二陣が小笠原長忠隊であった。第三陣が石川数正隊で、第四陣が本隊すなわち家康ということなので、当時、「両家老」などとよばれた酒井忠次・石川数正と肩を並べての出陣ということになる。長忠にしてみれば、さきの掛川城攻めと同様、家康に対する忠誠度を試される戦いという側面もあった。

『甫庵信長記』によると、第一陣酒井忠次隊、第二陣小笠原長忠隊がいつせいに姉川に馬を入れたとしており、これが、姉川の戦いの戦闘開始の合図になったという。

具体的な戦いの経過と、高天神衆の動きぶりについては、『四戦紀聞』の中の「江州姉川戦記」がくわしいので、つぎに、関連する部分を引用しておく。

……斯くて、先隊酒井・水野、鳥銃を打懸けて戦を始む。爰に小笠原長忠が手より、伊達与兵衛定鎮、吉原又兵衛、林平六、中山是非之助、伏木久内、群に技んで先登し、島の中を往き、堤の下に於て各鎗を合す。門奈左近右衛門俊政、渡辺金太夫照は、堤の上を往き、鎗を合す。しかるに門奈は、猿の皮の投頭巾を、頭形の兜にかけて著し、地水火風空の前立物顯然として掠物をば指さず。渡辺は、朱の雨笠に、金の短冊十八枚付けたる大掠物を指す。故に川向より、信長遙かに見給ひて感悦斜めならず。戦畢て、七人共に感状を賜はり、大に賞せらる。殊に渡辺には、日本第一の鎗といふ文字を加へて、帶し給ふ所の貞宗の脇指を与へらる。酒井忠次、水野、大須賀、小笠原長忠以下、三遠の諸士、競ひ掛つて突戦す。

(中略)

その長忠が従士小池左近、横井六郎兵衛、高須武太夫、朝比奈縣、松下平八、大須賀が手にては、久世三四郎、坂部三十郎、渥美源五郎、鷺山伝八を初めとして、三遠の鋭卒、競い追崩しければ、敵軍大に敗北し、右往左往に逃げ走る。

ここに出てきた、伊達与兵衛・吉原又兵衛・林平六・中山是非之助・伏木久内・門奈左近右衛門・渡辺金太夫の七人がいわゆる「姉川七本槍」とよばれるわけであるが、このときの小笠原長忠隊の奮戦ぶりは、このち、武田家中でも話題になったらしい。『甲陽軍鑑』品第三十七に、つぎのような記事があるのである。

初又、馬場美濃守・内藤修理・高坂弾正・山県三郎兵衛申は、さあらば、来年の御備定、春中いづかたへ御働なさるべきと申候へば、信玄公、上方侍衆内通申上の書付を取出させ給ひ、御覽候へば、遠州高天神の城主小笠原被

官共、江州姉川合戦に抜出たる走廻りいたし、信長・家康はら讃たる武士は、渡辺金太夫・林平六郎・吉原又兵衛・伊達与兵衛・中山是非ノ介、五人と書付にあり。信玄公仰らる。是等は若手の者、老功、中老、或ハ十九・二十の者迄、戦功を心懸たるよき侍、あまたか、へ持候。小笠原与八郎もわかしといへども、家康におとらぬ、高天神も武篇の家なれども、小身故、今川氏真牢人せられてより、家康旗下になり候。なん時信長と合戦あらば、家康を斬くづす事、肝要也。家康との合戦には、小笠原家中高天神衆、手に立べく候間、来春は遠州きとうぐん筋へ働候て、小笠原が弓箭のふりを、当家さき衆・二の手衆に勤弁さすべく候間、家康衆の事は、我家の秋山伯耆守、一兩度も当りて知ル。三川の国山家三方衆、此方へ帰伏なれば、大形家康衆あてがひは、しれて有。さ候へば、来春は高天神表へ働、夏中三川へ働、信長と家康間を取切ル。

やや長い引用になってしまったが、姉川の戦い後、小笠原長忠と高天神衆の働きぶりが武田信玄の耳に入り、信玄が、「わが先衆と二の手衆に小笠原長忠の戦いぶりを勉強させたい」とまでいつていたことがわかる。ある意味ではこれは皮肉なことではあったが、姉川の戦いにおける小笠原長忠と高天神衆の勇猛な戦いぶりが、信玄による翌年の高天神城攻めをよびこんでしまったといえる。

元亀二年三月の戦いと高天神衆

信玄は、元亀元年（一五七〇）の時点では相模の北条氏政と戦い、駿河国の深沢城を攻めたりしていたが、それも一段落し、いよいよ、本格的に遠江への侵攻を開始することになった。前年の十月八日、家康が越後の上杉謙信と盟約を結んだことを信玄が知り、それに刺激されたというのが真相であった。



▲三の曲輪址（与左衛門平）

『甲陽軍鑑』、『浜松御在城記』、『改正三河後風土記』などによって、このときの戦いの様子がわかるので、以下、元龜二年（一五七二）三月の高天神城の戦いについてくわしくみることにしよう。

この年二月十六日、信玄自ら二万の大軍を率いて甲斐の躰躰ヶ崎館を出発し、駿河国の富士大宮（現在、静岡県富士宮市）、田中を経て、同月二十四日、遠江の小山に入り、そこに城を築かせて、家臣の大熊備前守を入れ、三月五日、高天神城の巽（南東）の方角にあたる塩買坂に陣を張り、本格的な高天神城攻めにとりくみはじめた。

信玄は、このとき内藤昌豊を高天神城攻めの大将としている。『甲陽軍鑑』に信玄の言葉が載っている。

「あの出たる小笠原衆を、城内へ追入れ、味方引とるに、こみ出されざるやうに仕り候へ。彼小笠原衆は、去年の夏、江州姉川にをひて、信長・家康勝利を得候事、信長はにげたるに、家康手柄を仕り、大軍の朝倉を斬くづす。家康下にては、小笠原家中の者共、初合戦によく仕る故、姉川合戦信長・家康かちたる奇特、其手柄をはなの先へいたし、信玄馬のむきたるにも、武篇だてをすると見え候間、必味方もけがなきやうに、城の内へ追入て、帰り候へ。敵をうち取にも、かまはぬ儀なり。城内の小笠原衆を、押詰め、押みればよきこと也。」

これで見ると、信玄は本格的に高天神城を攻める気はなかったようであるが、遠江まで出てきて、ただ、城外に出ている兵を城内に押しもどすだけというのもおかしい話で、実際のところは、高天神城を攻めるべくここまで出てき

たものと思われる。しかし、高天神城が天嶮の要害に築かれた堅城であるのを見て、力攻めをあきらめたというのが真相だったのではなからうか。

このあと、信玄は、内藤昌豊を高天神城の押さえとして残し、三河に進み、伊那を通って甲斐にもどっているのである。

こうして、第一次高天神城の戦いは終わった。城兵が城外に出て、獅子ヶ鼻と国安川の二カ所で内藤勢と小競り合いがあった程度といわれている。

さて、このとき、高天神城に籠城した兵はどのくらいだったのだろうか。『甲陽軍鑑』品第三十七では、「高天神衆貳千余の小人数にて……」という表現をしているので、敵方、すなわち、武田方では、高天神城に二〇〇〇の兵が籠城しているとみていたことがわかる。

そこでつぎに、二〇〇〇といわれる籠城した高天神衆の主な顔ぶれについてみていくことにしたい。守備位置、人名、兵数については『高天神軍記』によった。

本 丸 (五〇〇)

〔大将〕小笠原与八郎長忠

〔武者奉行〕渥美源五郎勝吉

村松郷右衛門 福岡太郎八

大村弥兵衛

曾根孫太夫長一 三井孫左衛門光忠

三の丸 (二五〇)

〔大将〕小笠原与左衛門清有

〔武者奉行〕丹羽縫殿左衛門

小笠原庄太夫盛高 同清兵衛

同作右衛門興康

丹羽五郎右衛門

村松郷八

野々山七左衛門

鈴木五郎太夫

同権太郎

中根日野

松下助左衛門範久

西の丸 (二〇〇)

〔大将〕 本間八郎三郎氏清・丸尾修理亮義清

丸尾三郎兵衛 同五郎三郎 同新五郎 本間源右衛門 同五太夫 同兵右衛門 浅井吉兵衛

同五六郎 権田惣右衛門 山本与五右衛門 大河内孫右衛門 福富市平 小笠原治右衛門

岡本藤右衛門 松島五平 大原新平 高岡七兵衛 三井孫七郎 百々徳右衛門 佐和戸市兵衛

芝田四郎次 花井八郎右衛門 西郷市郎左衛門 岡本久弥 市川門太夫 高岡弥五右衛門

同瀬左衛門 村山八右衛門 見野浦茂左衛門 杉浦一学 同源七郎 柘植八右衛門 西村清左衛門

同八兵衛 朝比奈新助 同十左衛門

御前曲輪 (二〇〇)

〔大将〕 齊藤宗林・小笠原河内守長国

村松左近 同六郎右衛門 馬淵半一 杉浦能登郎 武藤源右衛門 勾坂牛之助 安西越前

池田縫平 伏木久内 梶川魚兵衛 浅羽次郎左衛門 漢人十右衛門 戸塚九平 小嶋与五右衛門

同武左衛門 海福久右衛門 黒田九郎太夫義則 同義得入道玄忠 大須賀五六左衛門

永田太郎左衛門清伝 槽屋善左衛門則高 池田左内 同十内 村井太左衛門 浅山吉兵衛

木村長兵衛 同又右衛門 市川門左衛門 荒瀬弥五左衛門 伊藤入道 松下平八 犬塚市平

同又右衛門 田中平助 赤尾孫助 客輪兵助 石野藤助 桜井源吉 浅田伊助 小川久助

桜井九郎右衛門

搦手 (二五〇)



▲搦手門址

〔大将〕渡辺金太夫照・小笠原長左衛門義信・林平六

杉浦左太夫 上田新左衛門 久野平太夫 同兵三郎 同三郎五郎

戸塚五左衛門 同半弥 長坂新五郎 佐々安右衛門 川上兵太夫

佐京権左衛門 村上佐太夫 宮地三郎太夫 森善右衛門

奥垣八内

大手池の段 (二〇〇)

〔大将〕小笠原右京氏義・赤堀大学正信

小笠原久兵衛良忠 小池左近 大石外記氏久 同新次郎久末

今沢弥右衛門 波切金右衛門 同金十郎 村越半右衛門

山下七郎右衛門 村田弥惣 野間与五左衛門 小嶋次郎右衛門

川田平兵衛 同平太郎 鈴木左内 同九郎左衛門 古川清右衛門

神野八郎兵衛 村井久右衛門 丹羽弥惣氏吉 牧野勘右衛門 八木勘左衛門 前島金太夫

加藤伝次 市川伝兵衛 戸田助左衛門 今村新之丞 坂部又十郎正家 奥村仁左衛門 長坂門三郎

浅羽角平 佐津川伝右衛門 海福武兵衛 堀田九郎右衛門 同九八 松嶋五兵衛 山中与五右衛門

星野新八郎 近藤武介 広田五左衛門 寺西市右衛門 松浦左太夫 門奈七郎右衛門 小柳津喜太夫

村松左内 大岡次郎太夫 村山八右衛門 小笠原与次郎 柴田作左衛門 竹田右衛門

帶曲輪 (五五)

吉原又兵衛

遊 軍 (一七〇)

伊達与兵衛定鎮 中山是非之助

以上、一七三名の部将名がみえるが、これがいわゆる高天神衆の主要メンバーである。もちろん、この人名が全くまちがいないという保証はなく、たとえば、三の丸を守っていた中根日野については、別本では中根日野之丞となっていて、若干の異同がある。

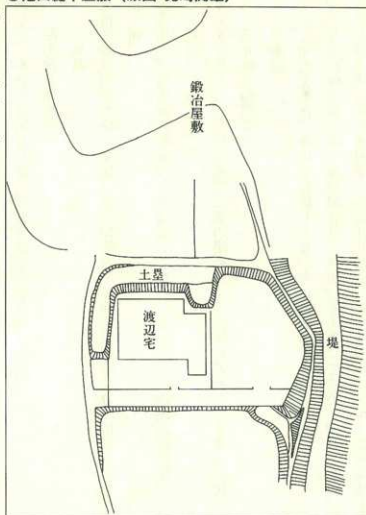
これら部将名は、大きく三つのグループから成っていたと思われる。一つは、城主小笠原長忠とその一族および家臣である。小笠原姓の人間はこのグループに入る。二つ目は、さきにみた、寄親寄子制の寄子である。ここには居住地の記載がないので、すべての部将名について明らかにすることはできないが、たとえば、御前曲輪の守備にあたり、それとすると池田縫平については、現在、静岡県小笠郡大東町毛森に「縫平屋敷」として、土塁が一部現存しており、その規模は明らかに戦国期の土豪屋敷の形態である。朝比奈の曾根孫太夫屋敷も土豪屋敷の典型的な例といえる。

平川の黒田九郎太夫、奈良野の鷲山伝八郎、岩滑の斎藤宗林、菅ヶ谷の川田平兵衛、松下の松下助左衛門、野中の久世三四郎、三俣の木村長兵衛、畑ヶ谷の渡辺金太夫、嶺村の渥美源五郎、下土方の坂部又十郎、保地の大石外記など、いずれも、その地の土豪（地侍）で、寄子として高天神城主小笠原長忠を寄親にしていた部将たちである。これら寄子がそれぞれ一〇人程度の被官を率いて参陣していたので、伝えられるように、二〇〇〇人規模になったのである。

もっとも、この二〇〇〇という数については、そのまま信用してしまうのは危険かもしれない。本丸に、実際五〇〇人の武士が結めることができたかどうか、問題があるのではなからうか。全体としてみると、伝えられる数の半分、すなわち、龍城兵は一〇〇〇人ぐらいだったのではないかと私は推定している。

●池田縫平屋敷（原図 見崎閑雄）

をあげることしよう。



高天神城に籠城した武士で、のち、徳川御三家の一つ紀州徳川家、すなわち、徳川頼宣に仕えた者が多い。『南紀徳川史』に「名臣伝」という項目があり、これは、紀州藩家臣三五〇〇家のうち、四三〇家を名臣として位置づけ、その系譜・履歴をくわしく記した内容となっている。

高天神城の本丸を守備した兵の中に福岡太郎八という武士がいた。その子孫が代々太郎八を称し、家譜が提出され

三つのグループといったもう一つはその他の人びとである。他国から流れてきた者もいたし、土豪よりランクは上で、今川氏の直臣だったような者で、小笠原長忠に同調し、ともに高天神城に籠城した者も含まれていた。

『高天神軍記』の史料としての信憑性を疑いながら、籠城した部将の名前の部分をここで使ったのは、部将名について、他の比較的良質な史料によってあとづけることがかなり可能だからである。いくつか具体例

ており、「名臣伝」には、つぎのようにみえる。

福岡太郎八光忠

家譜

父太郎右衛門ハ今川家ニ罷在、其後浪人仕、遠州高天神之城主小笠原与八郎方ニ罷在、権現様へ御味方仕、元龜元庚午年六月十八日、江州姉川御合戦之節、与八郎手ニテ、権現様御先手仕、高名御座候。同じく、本丸を守備した渥美源五郎勝吉の場合は、

渥美源五郎勝吉

家譜

遠祖之儀は相知れ申さず候。源五郎勝吉父十郎左衛門時頼は今川家へ奉公仕り、病死の後、源五郎儀浪人仕り罷在り候。

とのみ述べ、高天神城籠城のことは記してない。しかし、この渥美源五郎が、高天神衆の渥美源五郎と同一人とみてまちがいないであろう。

本丸を守備した三井孫左衛門光忠の場合は、家譜提出のときは子光正の代であつたが、つぎのようにみえる。

三井孫左衛門光正

家譜

父孫左衛門光忠儀、今川家に罷在り、今川没落後小笠原与八郎氏助後稱正小助権現様へ御味方、遠州高天神籠城の刻、与八郎隊下にて高天神籠城仕り、武田信玄大軍にて責め候砌、光忠儀、城外に於いて鎗合数度仕る。天正二甲戌年五月、城主氏助武田家へ降参仕り候刻、光忠儀同心仕らず、高天神城を引き切り、同国浜松へ罷り越し、権現

様へ御目見え仕り候處、城主の不儀に同心仕らざる段御懇の上意を蒙り、則ち仕え奉る。後高は知らず。その後、大須賀五郎左衛門康高に御預け遊ばされ、遠州横須賀へ引越し罷り在り、度々御陣御供仕る。

最後に「名臣伝」からもう一人、宮地六太夫についてみておこう。

宮地六太夫重武

家譜

今川家に仕え、今川家破滅の後、東照公に仕え奉る。遠州に於いて三千貫の地を賜わり、台命によって小笠原与八郎氏助の麾下に属し、高天神城に住す。戦功毎に之有り。天正二甲戌年五月、武田勝頼大兵を以って高天神責め候時、御後巻連引に及び、与八郎氏助、武田に降参し本丸に籠めらる。麾下の面々、氏助に随い武田へ降参の時、六太夫儀、氏助の麾下にて罷り在る。元和元乙卯年知らず。駿河に於て召し出され、南龍院様へ御奉公仕る。病死の年月日は知らず。

ここに、「南龍院様」とあるが、家康の十男徳川頼宣のことである。宮地氏は、さきに掲げた名簿では搦手守備に宮地三郎太夫の名があるだけで名前が一致しない。しかし、別本では、その他の籠城の士として宮地六太夫の名があり、これによって、宮地六太夫が籠城していたことがわかれる。

第四章 第二次高天神城の戦い

三方ヶ原の戦いとその影響

元龜二年（一五七二）三月の第一次高天神城の戦いは、以上みたように、武田信玄による示威行動といった性格が強く、城外で小競りあいがあった程度で、本格的な攻防戦ということにはならなかった。しかし、信玄は重臣の一人内藤昌豊に命じて高天神城を囲ませており、このときから高天神城は臨戦態勢をとることになったのである。

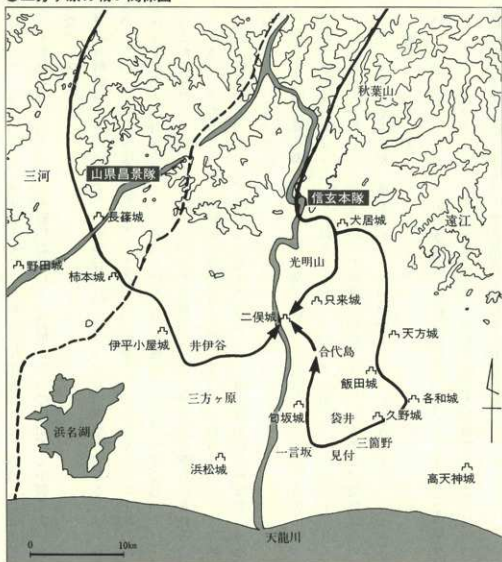
この時点で、家康と信玄とははつきり手切れになったが、信長はまだ信玄との同盟関係を破棄しようとは考えていなかった。そのころ、三好三人衆を敵とし、浅井長政・朝倉義景を敵とし、さらに石山本願寺と一向一揆を敵にまわしてしまった信長は、これ以上、信玄とは戦いたくないと考えていたからである。

そこで信長は、信玄が遠江に駒を進め、高天神城などを攻めたとき、家康に対し、「浜松城を放棄し、吉田城に退き、三河を死守することに専念した方がよい」と勧告しているほどであった。浜松城を放棄するということは遠江を放棄するに等しい。小笠原長忠ら高天神衆の守る高天神城はまさに風前の灯であった。

ところが、このとき、家康は、「浜松城を退くほどなら武士を捨てろ」といって、浜松城、ひいては遠江を死守する覚悟を信長に伝えているのである。

そして、年が改まって翌元龜三年（一五七二）十月三日、とうとう信玄が動き出した。信玄は二万五〇〇〇の大軍を率いて甲斐躰ヶ崎（つががき）を出陣し、高遠から伊那谷を通って、ちょうど天龍川筋を南下する形で信濃から遠江に進攻してきた。信濃国境の青崩峠および兵越峠を越えたのが十月十日で、早くも数日後には、家康方浜松城の支城である只来城（ただらい）（天龍市只来）が落とされている。

●三方ヶ原の戦い関係図



そのまま、まっすぐ進めば二俣城であり、その先に家康の本拠浜松城がある。誰もが、武田軍は一気に浜松城に押し寄せるものと考えていた。

ところが、信玄は、只来城を落としたあと、何と方向を変えて、天方城（静岡県周智郡森町天方）を攻め落とし、ついで飯田城（静岡県周智郡森町飯田）を攻め落としているのである。方向としては、同じく浜松城の支城である掛川城および高天神城を目標しているようにみえた。高天神城の城兵たちは、「いよいよ信玄がくるか」と身構えたものと思われる。しかし信玄は、

掛川城を攻めようとはせず、掛川城近くの各和城（掛川市各和）と久野城（袋井市鷺巣上末本）を攻めただけで、再び方向を転換して西に向い、三箇野川の戦い・一言坂の戦いで徳川軍と小競りあいを経りかえした末、二俣城攻めに向ったのである。

一見不可解にみえる武田軍のこの軍事行動は、実は、信玄の軍略のすごさを示すものであった。というのは、このときの信玄のねらいは家康をたたくことであつた。しかし、いきなり浜松城を攻めれば、各地の支城に配備されている徳川軍が武田軍の背後を襲ってくることになる。攻城戦において一番こわいのは、背後を襲われることであつた。当時はこれを後詰とよんでいるが、城内の兵と後詰の兵によつて挟み撃ちにされることを警戒していたのである。つまり、信玄はいきなり二俣城・浜松城を攻めることをせず、わざわざ迂回して天方城・飯田城・各和城・久野城を攻めてから二俣城に迫つたのは、浜松城を孤立させるため、掛川城・高天神城といった家康方の有力支城と遮断するこゝとがねらいだったのである。

この信玄の作戦は功を奏し、やがて二俣城も落ち、浜松城だけが孤立する形になつてしまつた。

信玄が浜松城を攻めようとしたのはその年、すなわち、元龜三年十二月二十二日のことであつた。しかし、このときも、信玄はただ浜松城を攻めるといった単純な作戦ではなく、手のこんだ策謀をめぐらしている。というのは、いつの時代でもそうであるが、城を攻めることは時間もかかるし犠牲性も大きい。そこで信玄は、「できれば城攻めではなく、家康をたたいてしまいたい」と考えた。

この日、信玄率いるおよそ二万の軍勢は、浜松城に接近したところで急に進む方向を変え、三方ヶ原の台地にはばたてしまつた。びつくりしたのは家康である。それが信玄の作戦であることに気づかず、籠城方針をやめ、三方ヶ原台地に討つて出、西に進もうとする信玄の背後を襲おうとした。

実は、これは信玄の家康おびき出し作戦であった。家康はまんまとその術策にはまってしまい、戦いとなった。このとき、家康軍は八〇〇〇、それに信長からの援軍が三〇〇〇おり、一万一〇〇〇といわれているが、信玄側には三河から進んできた山県昌景率いる五〇〇〇の別働隊が加わっており、二万五〇〇〇の大軍であった。家康は、この三方ヶ原の戦いで完膚なきまでにうちのめされてしまったのである。

信玄はこのときの出陣の主たるねらいは、翌年五月ごろと推定される信長との雌雄を決する戦いにあった。そのため、家康が浜松城に籠城してしまつては、討つのに手まどり、予定の作戦が実行できなくなることを心配し、こうしたおびき出し作戦をとつたものと思われる。

翌元龜四年（一五七三）は途中で改元されて天正元年となるが、その四月十二日、信玄が信濃の駒場こまば（現在、長野県下伊那郡阿智村駒場）で息を引きとってしまったのである。結局、自らの死によつて、信玄が考えた信長と雌雄を決する戦いは不発に終つた。この信玄の死が、信長、そして家康を助けたことはいうまでもない。

武田勝頼の猛攻

信玄は死に際し、「三年間は喪を秘せ」と遺言している。「信玄死す」の報が伝われば、若い勝頼では領国維持が困難に思えたからである。その遺言通り、勝頼は信玄の死を隠している。しかし、戦国時代は一面では情報戦争の時代であった。それまで京都をめざそうとした武田軍が急に甲斐にもどってしまったのをみて、まわりの大名たちは「様子がおかしい」と思いはじめた。死んだとまでは思わないにしても、武田側の動きが急ににぶくなったのをみて、「信玄は重態に陥つたのではないか」とみはじめていたのである。

今日、史料的に知られているかぎりで、「信玄は死んだかもしれない」という情報をいち早くキャッチしたのは、飛騨の江馬輝盛であった。そのころ江馬氏は上杉謙信と結んでいたが、信玄死後わずか十三日しかたっていない四月二十五日に、江馬輝盛の家臣河上富信が、上杉謙信の家臣河田長親宛の手紙の中で、「信玄の儀、甲州へ御納馬候。然る間、御煩の由に候。又、死去なされ候共申しなしか候。如何、不審に存知候。」（「上杉家文書」）といっている。

「信玄が甲州にもどったのは病気だかららしい。死んだともいわれている」と報じているのである。

信長および家康方が、信玄の死をつかんだのがいつかはわからない。しかし、四月の末か五月のはじめには、ある程度の情報を得ていたようである。というのは、五月九日には、家康の軍勢が大井川を越えて駿河に侵入し、岡部や駿府郊外に放火してまわり、武田方の出方をうかがっているからである。このときの家康軍による武田方の反撃の動きはにぶく、家康はその時点で信玄の死を確信したらしい。

信玄のあとをついだ勝頼が逆襲に転じたのは翌天正二年（一五七四）五月のことであった。五月三日、勝頼は二万五〇〇〇の大軍を率いて甲斐の躰躰ヶ崎館を出発した。軍勢の数は一説に二万ともいう。

武田勝頼のこのときの軍事行動のねらいは高天神城であった。高天神城を落とすことにねらいをしばっての出陣だったのである。五月十二日から高天神城は武田の大軍に包囲された。城主小笠原長忠は早速使いを浜松城に遣わし、武田軍の様子を伝え、後詰として援軍を送ってくれるよう要請した。

小笠原長忠からの要請をうけた家康は、武田勝頼が全力をあげて高天神城を包囲したことを知り、「自分の軍勢だけで後詰に出てもかえって負けてしまうおそれがある」と判断し、さらに信長に援軍を要請した。

ところが、運の悪いことに、ちょうどこの時期、信長は越前一向一揆との戦いに忙殺されており、遠江に援軍を送れるような状態ではなかったのである。



▲本曲輪址（千量敷・本丸）

なかなか後詰のこない高天神城では、武田軍による猛攻がくりかえされており、城内各所ではげしい戦いがあった。ただ、どういうわけか、徳川方の史料は六月に入ってから戦いがはじまったとしている。たとえば、『武徳編年集成』巻之十四には、「六月小、六日、甲州よりノ大兵、高天神へ発ス。」とあり、『改正三河後風土記』第十四巻も、「武田勝頼は六月三日より諸手の軍勢をすすめて、高天神城を攻かこむ。」と記している。

しかし、実際は、五月二十八日の時点で、高天神城は本曲輪（本丸）、二の曲輪（二の丸）、三の曲輪（三の丸）の三つを残すだけだったのである。真田文書（『信濃史料』第十四巻）につきのような武田勝頼発給の文書がある。

念に入れられ、節々脚力到来、珍重に候。先書に願わし候ごとく、当城涯分油断なく諸口相稼ぎ候故、本・二・三

の曲輪塀際迄責め寄せ候。落居十日を過ぐべからず候。昨今は種々惴望候といえども、許容すあたわず候。然れども、僥倖軒医療故、一徳斎煩らい少々験氣を得らるの由、大慶に候。猶、その城用心疎略なく肝災頼み入り候。恐々謹言。

（天正十一年）

五月廿八日

勝頼（花押）

（宛名欠く）

文中、「当城」とあるのが高天神城であることはいうまでもない。この文書によれば、すでに五月二十八日の時点で、高天神城は、本曲輪・二の曲輪・三の曲輪の塀際まで攻め込まれていたことがわかる。

もともと、この文書は、城を攻めている側の武田勝頼の文書なので、多少宣伝めいたところがあり、事実を誇張していたことはあったかもしれない。



▲二の曲輪址（西曲輪・丹波曲輪・二の丸）



▲本間・丸尾兄弟戦死の地

候。但し、三日の内に責め破るべく候。心安かるべく候。城主、今日は種々惘望候といへども、許容するあたわず候。恐々謹言。

六月十一日
(天正一書)

勝頼（花押）

大井左馬允入道殿

この文書によって、堂の尾曲輪は塔の尾曲輪とも書かれていたことがわかるわけであるが、六月十日の時点でこの堂の尾曲輪もおちたことがわかる。ここに「城主」とあるのはいうまでもなく小笠原長忠のこと、このころ、小笠原長忠から武田勝頼に対し、「種々惘望」がなされていたようである。このころには、家康からの後詰もなく、小笠

しかし、六月十一日には堂の尾曲輪も落ち、本曲輪・二の曲輪のみだったことが、つぎの武州文書（『信濃史料』第十四巻）からわかる。

当陣の様子心許なきの旨、跡部大炊助所へわざわざ飛脚、祝著に候。その城用心等油断なきの由、肝要至極に候。当城の儀、去る十二日、諸口を取り詰め相稼ぎ候故、昨日、塔の尾と号する随分の曲輪乗っ取り候。本・二曲輪ばかり指し措き

原長忠としても生き残る道を模索しはじめていたものであろう。勝頼は、ここでは「許容するあたわず候」とか、「あと三日で城を落としてみせる」とかなり強気のことをいつているが、実際は、一カ月も城を攻めているのに容易に落ちないので、本心は焦りはじめていたようである。

良質の史料とはいえないが、その後の経過が手ぎわよくまとめられているので、『改正三河後風土記』の文章をつぎに引用しておくことにしよう。

……馬場・山県・内藤等古老の者共、勝頼を諫て申けるは、「此城の形勢中々急に落べからず。其間に織田・徳川両旗にて後卷あるならば、寄手敗軍疑なし。兼て聞伝ふ所、与八郎剛勇余り有て義操不足せり。義心薄ければ必利欲深き者也。元来、原と小笠原兩人にて城飼都を押領せし所、原は断続せしかば、与八郎一人にて其所を知行し、近来今川と縁を結び、其威をかり、国中に権勢をふるひながら、今川氏真が衰運にのぞみ、いつか敵となり徳川に随従す。かく節義をしらぬ者なれば、調義やすかるべし」と申せば、勝頼尤と同意し、近辺の僧を使とし城内へ申遣はしけるは、「与八郎が勇略聞しに越、当時無双の弓取也。然るに大軍にかこまれ、日々夜々苦勞するとも、信長は表裏第一の姦人、徳川は少身にて力たらず、後詰を頼まるとも頼母しからず。また、代々徳川が恩顧の被官といふにあらず。此程に龍城防戦苦辛にて一応の義理は済たり。此上は一身の安危をはかり、子孫眷族の苦楽をおもひ、はやく勝頼に一味し、城を開て降参あらば、この城飼都に引替て、別に一万貫の地を授け、其上龍城の諸士卒悉く本領安堵せしむべし。この事さらに偽にあらず」とて、頼母しく慫慂に詞を尽し、また勝頼が誓詞に侍大将共が誓詞をそへて送たり。

与八郎、元来勇ありて義なければ、浜松の加勢延引するを以て、徳川殿我等が天王山・姉川の忠功を水にせらるるという者なりとて、怨み憤りを含たる折節、勝頼が利を以て誘引するを喜び、敵となり味方となるも戦国のなら

ひ、何ぞ小義にかかはり空しく家門を滅却すべき。早く勝頼に降参し、後栄を期すべきとて、忽に降参す。依て高城は武田方へ請取て、横田甚五郎尹松等に在番せしめ、与八郎には駿河国富士郡鵜飼栖にて一万貫の所領を授く。此とき、渡辺金太夫・中山是非之助・斎藤宗林等、与八郎と同じく武田へ降参すれば、みな懸命の地を与ふ。其中にも久世三四郎・坂部又十郎等は義を守りて敵には降らず。城を出て退散し各在所へ引とる。此時世上にて、甲州へ降り駿州へ趣ものを東退といひ、遠州へ引取久世・坂部等の人々を西退と申けるとぞ。

細部はともかくとして、流れとしては大体この通りだったものと思われる。勝頼としては、家康、さらに信長からの後詰が到着する前に何とか城を落とすか、開城に追いこもうと考えており、調略が功を奏したということになる。

ここで、小笠原長忠に与えられた土地を「駿河国富士郡鵜飼栖」としているが、富士郡には鵜飼栖などという土地はない。『武徳編年集成』には「駿州富士郡鵜飼栖」とあるので、「おうむす」、すなわち重須であったことがわかる。

一万貫ということで、これを近世の石高に換算して一〇万石とする説もあるが、一貫文の換算値は一石から一〇石まで幅があり、必ずしも一〇万石ということにはならないが、勝頼は、何としても高天神城を手に入れたい一心から、小笠原長忠に好条件を提示して味方に誘ったことはまちがいのないところである。

さて、このときの開城の条件として、勝頼は城兵の命を保障した。そればかりか、「城主小笠原長忠とともに武田勝頼方につくもよし、そのまま徳川家康方に残るもよし」といって、その後の進路は各人の判断にまかせることとした。そして、武田方についた者が「東退」、徳川方に残り、浜松城に入った者が「西退」とよばれたことになる。『横須賀根元記』によると、「東退」のメンバーは、

鯨島加賀 横井越前 林平六 中山是非之助 渡辺金太夫 滝弥之助 馬淵半一 杉浦能登郎
武藤源石衛門宗清 池田縫平 伏木久内 伊達藤十郎 朝夷佐太夫 倉地加兵衛 伊達与兵衛

戸塚九平 小嶋与五右衛門 同武右衛門 海福久右衛門 海福主税之助 宮地六太夫 牧伝兵衛
戸塚左近右衛門 吉原又兵衛 梶川魚兵衛
であり、「西退」のメンバーは、

丹羽縫殿左衛門 松下助左衛門 木村長兵衛 曾根孫太夫 門奈左近右衛門 渥美源五郎
三井孫左衛門 福岡太郎八 野々山七左衛門 佐津川平右衛門 幡鎌三平 安西越前 匂坂牛之助
同加賀 福島十郎右衛門 同河内 小笠原一族十余名 本間権三郎正季
となっている。これらのうち、「東退」では宮地六太夫、「西退」では、渥美源五郎・三井孫左衛門・福岡太郎八が、
さきにみた『南紀徳川史』所収の「名臣伝」によって確認される。

開城後の高天神城

高天神城で小笠原長忠らが武田軍の猛攻を必死になって防いでいるころ、家康からの援軍要請をうけていた信長は、越前一向一揆の討伐をあとまわしにして、高天神城に対する後詰に向かうことになった。そのあたりの様子は『信長公記』にくわしい。すなわち、

六月五日、武田四郎勝頼、遠州高天神城小笠原御身方として居城候を、相働き取巻の由注進候。則、後詰として、六月十四日、信長公御父子濃州岐阜を打立ち、十七日、三州の内吉田の城坂井左衛門尉所に至って御着陣。六月十九日、信長公御父子、今切れの渡り御渡海あるべきの処、小笠原与八郎逆心を企て、摺領の小笠原を追出し、武田四郎を引入れたるの由申し来り候。御了簡なく、路次より吉田城迄引帰へさせられ候。家康も遠州浜松より吉田へ

御出で候て、御礼御申すの処に、今度御合戦に及ばれざる事、御無念に思食させられ候。御兵糧代として黄金皮袋
二ツ、馬に付けさせ家康公へ参らせらる。

とあり、信長は自ら兵を率いて六月十四日に岐阜城を出発していたのである。「信長が後詰に向った」という報が高天神城にすぐ届いていれば、六月十七日の開城はなかったにちがいない。高天神衆はもう少しがんばっていたはずである。

ところが、実際には、六月十七日に開城してしまい、『信長公記』にあったように、「高天神城が開城してしまつた」という報が信長のもとに届いたのは、今切の渡しを渡っているときであつた。

このとき、信長がどの程度の軍勢を率いて救援に向かつたかは不明で、鉄砲もどのくらい用意していたのかわからない。しかし、仮に、高天神城の開城があと数日遅れ、信長・家康連合軍が援軍として後詰をしていれば、高天神城外でかなり大規模な戦いがくりひろげられたはずである。というのは、翌天正三年（一五七五）の長篠の戦いと図式が全く同じだからである。もしかしたら、長篠の戦いに匹敵する戦史に残る戦いが高天神城外でくりひろげられたかもしれない。

大久保彦左衛門忠教の『三河物語』にも、

……然る処に、天正二年甲戌、勝頼御出馬有て、高天神の城を押し寄て責させ給ふ処に、信長、後詰と成されて御出馬有りければ、小笠原与八郎手替りをして居成に成ければ、信長、手を失ひ給ひて、吉田より引歸らせ給ふ。

とあり、信長が、むなしく帰っていったことを記している。ここに「居成」とあるのは、小笠原長忠が城を明け渡さず、そのまま居城し続けたことを意味する。

ただ、ここで気になるのは、さきに引用した『信長公記』に「小笠原与八郎逆心を企て、掎領の小笠原を追出し」

云々とみえる点である。惣領は惣領と同じで、小笠原氏の家督の意である。この時点で、城主は小笠原長忠であり、長忠が家督をついでおり、したがって惣領だったはずである。信長方にまちがった情報がもたらされたと解すべきなのかもしれない。

では、つぎに、開城後の高天神城はどうなったのかについてみておくことにしたい。『三河物語』にあったように、小笠原長忠がそのまま「居成」をしていたことは事実である。それは、長忠改め信興名の文書が、開城直後から高天神城周辺村々の神社に出されていることから明らかである。

大塚勲氏の「武田・徳川の抗争―天正元～四年―」（『駿河の今川氏』第七集）によると、小笠原信興の名で、同年すなわち天正二年七月十四日、佐東宗禅寺の寺領を安堵し、同二十日には横須賀普門寺再興の申請を許可し、同二十七日、櫛城検校という者が土方華嚴院に寺領を寄進したのを承認しており、八月八日、比木の賀茂神社、同十五日、比木の正福寺、同二十六日、大淵西方の宝珠寺に所領安堵状を出しており、高天神城周辺の支配をそのまま引きついでいたことがうかがわれる。

小笠原長忠（＝信興）が、いつまで高天神城に在城し、高天神城領支配を行っていたかは厳密にはわからない。しかし、天正三年（一五七五）十月二十三日付の村松文書（『静岡県史料』第四輯所収）で、高天神城の在番衆の濫竽狼藉を停止する文書を出したのを最後に、遠江での文書発給がなくなることは、在城時期を考えていく上での一つのヒントになると思われる。

この点で注目される文書がもう一通ある。天正三年二月二十四日の一乗院宛の信興判物（尊永寺文書『静岡県史料』第五輯所収）である。そこに、「今度、不慮参府成され候」という文言があり、さらに「甲府御逗留」云々ともあり、参府は、甲府へ参ることを意味していることがわかる。つまり、小笠原長忠（＝信興）は、少なくとも天正三

年の時点で高天神城の城主としての地位を解任されていたことが判明する。

それに代わって高天神城に入ったのは横田甚五郎尹松であるが、勝頼は、当初、横田尹松よりもっと『大物』を入れようとしていたらしい。「甲斐稲葉文書」に天正二年と推定される六月二十五日付、勝頼から穴山梅雪に宛てた文書がある。すなわち、

芋谷の慶三儀について、櫛付の芳札つぶさに披見。すなわち相尋ね候のところ、一兩日以前に帰国の由申し候条、興津豊後守に申し付け、高天神まで早飛脚を遣わし候。さだめて召し返すべく候。なお、山県着城候へば、早速御帰陣もつとに候。恐々謹言。

六月廿五日

勝頼（花押）

玄蕃頭殿

というものである。高天神城を開城させたあと、勝頼は玄蕃頭、すなわち一族で重臣の穴山梅雪に高天神城をまかせて帰陣した。しかし、穴山梅雪は、駿河江尻城主で、駿河支配の責任者であったので、いつまでも高天神城に置いておくわけにはいかなかった。そこで勝頼は「山県」を、そのかわりに高天神城に入れようとしていたことがこの文書から読みとれるのである。

もつとも、武田勝頼の家臣に「山県」姓は何人もいたわけで、何も山県三郎兵衛昌景に特定することはできない。しかし、この時期、苦勞して落とした高天神城を托せる部将としては山県昌景しかいなかったのではなからうか。私は、このころ、勝頼が、駿河を穴山梅雪にまかせ、遠江を山県昌景にまかせる構想を描いていたと考えている。

ところが、それは構想倒れに終わってしまったのではなからうか。歴戦の兵である山県昌景をそのまま高天神城に置いておけるだけの余裕が武田軍にはなかったのである。結局、『大物』山県昌景の入城は見送られ、横田尹松が入

ることになったのである。横田尹松の人物像と入城についてはつぎの章でくわしくみることにしたい。

なお、ついでなので、ここでその後の小笠原長忠（『信興』）についてまとめておこう。さきにもみたように、長忠は、駿河国富士郡下方荘のうち、重須（現在、富士市）において一万貫の所領を与えられることになったが、所領は重須だけでなく、由比（現在、静岡県庵原郡由比町）方面にもおよんでいたことがつぎの文章でわかる。

高天神より引越候被官共、何の地に居住といへども、諸役等御免有るの由、仰せ出さる者也。仍つて件の如し。

丑
（天正十年）

十二月朔日

信興□（朱印）

由比之内

二郎兵衛

彦次郎

こうして長忠は、武田勝頼麾下の一部将として、富士郡および庵原郡において一万貫を領する中堅どころの家臣という扱いをうけていたが、どういうわけか、その後は歴史の表舞台に登場してこない。掛川城攻め、姉川の戦い、そして第一次、第二次の高天神城の戦いにおける戦いふりが強く印象として残っているためか、武田勝頼に属してからは、どちらかといえば、鳴かず飛ばずといった感じをうける。やはり、高天神衆あつての小笠原長忠だったからかもしれない。

天正十年（一五八二）三月の武田氏滅亡のときまでは武田勝頼の家臣であつた。そこまでは確実である。ところが、その後の長忠については、史料によって二つに分かれる。

一つは、武田氏滅亡後、小田原城の北条氏政を頼り、氏政は長忠をかくまうて鎌倉に置いていたが、家康がそのこ

とを知り、信長を通して北条氏政にその事情を話し、氏政の手によって殺されたというものである。『寛政重修諸家譜』巻第千二百四十一の「小笠原系譜」に、「武田家没落ののち、小田原に通れ、北条氏政によりて鎌倉にかくれるの所、東照宮きこしめされ、右府につげさせたまひしかば、右府すなはち氏政をしてこれを誅せしむ。」とある。

「右府」は織田信長のことである。『改正三河後風土記』も同じで、

小笠原与八郎長善、先年、高天神の城を明て勝頼に降参し、今度又北条をたのみ小田原へ立退しを、信長公より仰遣はされ、北条方にて誅し、首をば浜松に奉る。

とある。『改正三河後風土記』は小笠原長忠のことを一貫して長善と記しているのも、これが長忠のことであることは明らかである。

つまり、この二つの史料でみれば、長忠は、信長が本能寺の変で明智光秀によって討たれる天正十年六月二日以前に殺されていたことになる。

もう一つは、天正十八年（一五九〇）七月、豊臣秀吉による小田原征伐のとき、後北条氏が滅亡してしまったので、北条氏政・氏直父子にかくまわれていた長忠が殺されてしまったというものである。『浜松御在城記』（『浜松市史』史料編一）に、

与八郎長忠事、富士ノ根方ヲ知行仕候處ニ、甲州崩ノ時ハ北条へ降参、北条没落ノ時、権現様御成敗仰セ付ケラレ候。

とある。

天正十年三月から六月までに殺されたのか、同十八年七月に殺されたのか、二つの考え方が生まれてくるわけであるが、信憑性の高いのは「浜松御在城記」の方なので、ここでは天正十八年（一五九〇）七月説をとっておくことに

しよう。

なお、天正二年六月の開城のとき、家康から軍監として送りこまれていた大河内源三郎正局が捕えられ、石牢に閉じこめられるということがあったが、詳細については第六章で述べる予定である。

以上みてきたように、天正二年の戦いは、家康にとっては苦い経験であった。しかし、城を取られたからといって、そのまま手をこまねいている家康ではなかった。家臣の心をつなぎとめておくべく、うつべき手はきちんとうつていたのである。

たとえば、武田軍に包囲された高天神城から浜松城のもとに第一報をもたらした句坂牛之助にはつぎのような所領宛行状（『浅羽本系図』所収文書『徳川家康文書の研究』上巻）を出している。

今度高天神通路無きの處、使として出入忠節の至也。其賞として宇荊郷に於て百貫文の所出し置き、永く相違有るべからず。本意の上、望の地替地せしめ出し置くべし。此の旨を守り、^{いよいよ}弥走り廻るべき者也。仍つて件の如し。

天正貳年^戊

五月廿二日

家康御書判

句坂牛之助殿

五月二十二日といえは、まだ戦いの最中である。家康は、連絡役という重要な役目を果たした句坂牛之助の戦功を賞したのである。

もう一通は、戦いの後の文書で、文中、高天神云々という語はみえないが、天正二年の戦いの戦功に対する所領安堵状を本間文書（『徳川家康文書の研究』上巻）から掲げておこう。

遠江国山名郡石野郷内、小野田村の事

右、今度遠州再乱せしむといえども、疎略に存ぜず別して走り廻ると云い、本領と云い、代々の證文にまかせ、彼の地前々の如く、一円永く補任し畢おひらぬ。然らば、神社仏事領き、山林野河原等、先規の如く支配せしむべし。自今以降、自余の輩、如何様の忠節を以て訴訟を企つといへども、一切許容に及ぶべからず。この旨を守り、弥忠節いよいよを抽んずべきの状件の如し

天正二年

戊申

七月十日

家康御書判

本間十右衛門尉殿

(亥)

城を取られたが、家康はこのように所領の安堵などを積極的に進め、家臣たちの気持ちをつかんでいったのである。これが、高天神城を奪還していくための布石になっていった。

第五章 武田方城番横田甚五郎と岡部丹波守

横田甚五郎尹松の入城

武田勝頼は、高天神城に城番として横田甚五郎尹松を入れた。そこでまず、城番として入った横田甚五郎尹松とはいかなる部将なのかについてみていくことにしよう。

仮名の甚五郎は、のち甚右衛門に改めているが、高天神城在城時代は甚五郎なので、甚五郎で通しておきたい。名乗りの尹松は、ふつう「ただまつ」と読んでいるが、養祖父にあたる横田備中守高松の場合、高松で「たかとし」とよませているので、尹松も「ただとし」と読んでいたのかもしれない。

尹松の系譜および履歴について簡潔にまとめている文章が『甲陽軍鑑』品第五十五にある。これは、だいぶのちになるが、高天神城内で天正八年（一五八〇）に争論がおきたとき、横田尹松から訴状が出されたことについての勝頼の言葉としてみえるものである。

……勝頼公横田申上ル儀を聞召、彼甚五郎養の祖父横田備中も大剛の者にて、信虎公より信玄公へ二代奉公申、信玄公の御代に信州上田原にて討死する。本の祖父原美濃守は、近国・他国にて摩利支天のごとくにいはれたる隠なき大剛の兵なり。甚五郎父の十郎兵衛も、養父備中守、本の父原美濃守にもさのみ劣ぬ剛ノ者なりつるが、長篠にて討死する。備中は伊勢牢人、美濃守は関東下総牢人也。信虎公・信玄公今某まで三代、又彼等も甚五郎まで三代召つかひ候譜代なる故、某ためを大切に在る事、自余の者共に各別にすぐれたり。さりながら、いかに譜代といふ共、某身健になくば、我身を捨、勝頼を思ひ、後詰無用と申こすまじく候。流石に祖父・ちの脉をつぎ、此年甚五郎廿七歳なれ共、弓矢の積五十・六十の者より能仕候。彼甚五郎も十九歳にて味方が原合戦に穴山手に罷有、穴

山内剛の者共にすぐれて走廻り、しかもよき高名を仕る。其後、此以前も遠州小山・駿州土岐などへ番手に指越候に、甚五郎をば智の小幡又兵衛、信玄公の御代より数度の武功おぼえある者にも恥らるるほど利発に走廻候。今我旗本にて、中老に小山田八左衛門、初鹿野伝右衛門、若手には城ノ織部ノ助、横田甚五郎これらなりと仰られ、殊ノ外御褒美なされ候。

これによって、系譜関係がよくわかるわけであるが、略系図を作るとつぎようになる。

横田高松——康景——尹松

原 虎胤——康景

横田備中守高松も原美濃守虎胤も、いわゆる「武田二十四将」のメンバーとして知られている。ここに引用した『甲陽軍鑑』では、高松は天文十七年（一五四八）の上田原の戦いで戦死したとしているが、実際はその二年後の天文十九年（一五五〇）九月一日の信州戸石合戦で戦死したことが『高白斎記』および『妙法寺記』によって明らかである。

高松には子どもがなく、子だくさんの原美濃守虎胤から一子をもらいうけ養子とした。その一子というのが尹松の父にあたる康景である。綱松といったともいうが、横田家の通字「松」を継承したとすればその可能性がある。どういふわけか、康景は虎胤の長男だったという。虎胤は、自分の長男を横田備中守高松の養子に出したことになる。この康景がさきに引用した『甲陽軍鑑』に「甚五郎父の十郎兵衛」として出てきた人物である。

ちなみに、『甲陽軍鑑』品第十七「武田法性院信玄公御代惣人数之事」は、信玄時代の家臣団構成をあらわしたものであるが、それを表にすると次ページのごとくなる。これで見ると、尹松の父横田康景（綱松）は、足軽大将衆の

●信玄時代の家臣団構成

(服部治則「武田家臣団組織と親分子分慣行」『山梨大学学芸学部研究報告』10号による)

御親族衆	武田典範信豊	200騎	
	武田逍遙軒信綱 (刑部少輔信廉)	80	
	武田四郎勝頼	200	(信州伊奈高遠に在城)
	一条右衛門大夫信竜	200	
	仁科五郎盛信	100	
	葛山十郎信貞	120	
	板垣左京亮信安	120	(駿州田中に在城)
	木曾伊予守義昌	200	
	穴山玄蕃頭信君	200	
御譜代家老衆	馬場美濃守信房	120	(信州牧之島在城)
	内藤修理亮昌豊	250	(上野箕輪在城)
	山県三郎兵衛尉昌景	300	(駿州江尻在城)
	高坂弾正忠虎綱	450	(信州海津在城)
	小山田正兵衛尉信茂	299	(都留郡在城)
	甘利左衛門尉昌忠	100	(永禄7年死亡ののち陣代米倉丹後重継)
	栗原佐兵衛詮冬	100	
	今福淨閑斎	70	(駿河久能に在城)
	土屋右衛門尉昌次	100	
	秋山伯耆守信友	50	(美濃岩村在城)
	原隼人佑昌胤	120	(内50は外様近習)
	小山田備中守昌行	70	
	跡部大炊助勝資	300	
	浅利右馬助信種	120	(永禄12年戦死ののち彦次郎)
	駒井右京亮昌直	55	(内50は外様近習)(駿州深沢在城)
足輕大將衆	小宮山丹後守昌友	30	(元亀3年戦死)(上州松枝在城)
	跡部美作守勝忠	50	
		[騎馬] [足輕]	
	横田十郎兵衛康景(綱松)	30騎	100人
	原与左衛門(勝重)	10	50
	市川梅印(梅隠斎等長)	10	50
	城伊庵(和泉守景茂)	10	10
	多田治郎右衛門(正治)		10
	遠山右馬助直景	10	30
	大熊備前守長秀	30	75(遠州小山に在城)
	長坂長閑(釣閑斎光堅)	40	45
	下曾根覚雲軒	20	50(信州小室に在城)
	曾根内匠助昌世	15	30
	武藤喜兵衛昌幸	15	30
	三枝勘解由左衛門守友	30	70
	小幡弥左衛門光盛	12	65

一人で、騎馬武者三〇騎、足輕一〇〇人の大将で、足輕大将（足輕隊將）のトップにランクされる部將だったことがわかる。

尹松は、元龜三年（一五七二）の三方ヶ原の戦いときには十九歳だったという。したがって、天正二年（一五七四）、高天神城の城番に命ぜられたときは、まだ二十一歳の若さであった。

勝頼がなぜ若い横田甚五郎尹松を高天神城の城番に抜擢したのかについては、これまで、必ずしも明らかにされてきたとはいえない。さきの『甲陽軍鑑』の記事からの類推ではあるが、私は、尹松が、三方ヶ原の戦いとき、穴山梅雪の手に組みこまれていたのが直接の要因ではなかったかと考えている。というのは、さきに引用した甲斐稲葉文書から、勝頼は、高天神城開城後、しばらく城を穴山梅雪にゆだねていた事実が明らかだからである。穴山梅雪が、自らは駿河にもどらなければならないため、自分の手下で一番有能な横田甚五郎尹松に白羽の矢をたてたと思われるのである。

岡部丹波守の入城

天正二年（一五七四）の戦いで武田方の城となった高天神城であるが、翌三年（一五七五）五月の三河長篠の戦いで勝頼が大敗を喫したことにより、高天神城をめぐる勢力地図も大きく塗りかえられることになった。

そもそも、長篠の戦いの発端は、天正二年の高天神城の戦いにあつたとさえいわれている。というのは、勝頼にとって、父信玄ですら落とすことができなかった高天神城を、自分が落としたというわけで、これが自信過剰につながったというのである。

勝頼にとって、その時点で高天神と同じような、目の上のたんこぶ⁴的存在だったのが三河の長篠城であった。長篠城は、天正元年（一五七三）に徳川家康方となり、家康は特にこの城を重視し、翌三年二月には大々的に修築し、防備を固めて、奥平信昌を城主として武田方からの攻撃に備えさせていたのである。

勝頼が、高天神城を落とした勢いで、その余勢をかって長篠城を包囲しはじめたのが五月十一日のことであった。武田軍の来攻を知った家康は、さきの高天神城のときと同じように、信長に後詰の援軍を要請した。そのとき、信長は前年の高天神城のときと同じように畿内での戦いに忙殺されていたが、高天神城の二の舞になることを恐れた。「昨年の高天神城と同じように長篠城も落とされれば、同盟者家康の領国支配は成り立たなくなる」と考えた。それ以上に、家康との関係が切れてしまうことを心配したのであろう。

要請があつてすぐ兵を三河に走らせたのである。信長自身三万の大軍を率い、三〇〇〇挺の鉄砲を用意し、長篠城外の設楽ヶ原（愛知県南設楽郡鳳来町）に布陣した。五月十八日のことである。

戦いは五月二十一日にくりひろげられた。これが戦史に有名な長篠の戦いである。このとき、戦国最強とうたわれた武田騎馬隊は、信長の三〇〇〇挺の鉄砲を駆使したいわゆる「三段撃ち」によって倒されてしまった。武田軍は一五五〇〇とも一五三〇〇ともいわれているが、「信長公記」によると、山県三郎兵衛・西上野小幡・横田備中・川窪備後・きなど源太左衛門・土屋宗蔵・甘利藤蔵・杉原日向・なわ無理介・仁科・高坂又八郎・奥津・岡辺・竹雲・恵光寺・根津甚平・土屋備前守・和気善兵衛・馬場美濃守ら錚々たるメンバーをはじめ、雑兵一万ばかりが討死したという。一万という数はそのまま信用できないにしても、武田軍の完敗であつたことはまちがいない。この日を境にして武田氏の衰退がはじまり、勝頼のそれまでの攻勢は守勢に転じていったのである。高天神城の城番（城将、城代とも）が横田甚五郎尹松から岡部丹波守に替わった要因として、この長篠の戦いの敗北が関係していたとみてよ

いであらう。

では、横田甚五郎尹松から岡部丹波守への交替は具体的にいつのことなのだろうか。これまでの研究では、必ずしも史料的な根拠が記されていないが、それは、天正七年（一五七九）のこととされてきた。

史料的な根拠になるのは、つぎに引用する元禄十二年（一六九九）板行の『甲陽軍鑑伝解』ではないかと考えている。『甲陽軍鑑』にみえず、『甲陽軍鑑伝解』にみえる理由については明らかではない。天正七年の記事に続けてつぎのように記されている。

一、同年、^{（天正七年）}遠州高天神へ御人数千余り、番替りにさし越給ふ。駿河先方岡部丹波守・信州相木、其外上野侍騎馬二三騎ばかり持たる衆、或ハ駿州先方孕石主水を初二三騎持たる衆、或一騎合の直参衆に旗本より足輕大将江馬右馬丞・横田甚五郎を万御目付警固の為にさし添こし給ふ。さて又、此侍衆寄合衆なれ共、岡部丹波守を大將分に定らる、事、丹波大剛の譽れをとりたる武士故此の如し。

このように、天正七年八月に岡部丹波守が高天神城の城番となり、それまで城番だった横田甚五郎尹松が軍監になったのである。ただ、交替が、天正七年でも、八月だったのかどうかについては問題がないわけではない。

「土佐国蘆簡集残篇」所収文書に、このことを考えていく上で興味深い文書がある。すなわち、

急度一筆を染め候。仍つて高天神番替差し越し候間、間道の儀相頼み候。備帳見合われ、心得有り、高天神根古屋迄送り届けられ、帰番の衆召し連れ帰陣尤に候。備え^{（おぼ）}猶ならざる様肝要。悉皆任せ入り候。恐々謹言。

追て、畢竟^{（ひつじやう）}室大・朝駿・城意談合尤に候。

六月十四日

勝頼判

岡部丹波守殿

というもので、年欠六月十四日付、武田勝頼から岡部丹波守に宛てられた文書である。

この文書、高天神城の番衆交替に関係した文書であることが明らかなので、天正七年に比定される。ということは、すでに、八月以前に具体的に動きはじめていたのかもしれない。あるいは、六月にうけた勝頼からの指示にもとづいて、具体的に番衆の交替がなされたと考えていることもできる。ちなみに、追而書にみえる「室大」は室賀氏、「朝駿」は朝比奈駿河守で信置、「城意」は城伊織のことではないかと考えられる。

岡部丹波守の人物像

ここまで私は、横田甚五郎尹松に替わって高天神城の城番として入った部将の名をただ岡部丹波守とのみ記してきた。実は、丹波守の名乗り、すなわち諱^{いみな}については、長教・真幸・長保と、史料によってまちまちなのである。ここでその問題を考え、あわせて、丹波守の履歴ならびにその人物像についてスポットをあててみたい。

岡部丹波守は、さきに引用した『甲陽軍鑑伝解』に「駿河先方^{さきあた}」とあったように、駿河先方衆の一人であったことが明らかである。駿河先方衆というのは、もともと駿河今川氏の家臣で、武田氏が駿河を占領してからその家臣になった部将たちのことをいう。いわば、旧駿河系というか、今川遺臣系武田家臣の意味である。

戦国時代の半ばごろまでは、のちの信長・秀吉の時代とはちがって、ある戦国大名に仕えていた部将が、自分の主君が戦いに負けて滅ぼされてしまったようなとき、そのまま牢人することは珍らしく、すぐ、別な戦国大名に仕えるのがふつうであった。多くの場合、この岡部氏のように、今川氏に仕えていても、その今川氏を滅ぼした張本人である武田氏に平気で仕えているのである。

江戸時代の儒教的武士道徳では、「武士は二君にまみえず」などというが、戦国時代においては、家を存続させるため、強い者へなびいていくのが一般的な傾向であった。これを私は「強い者への傾斜の論理」などと表現している。岡部丹波守は、今川氏真が掛川城を逐われて後北条氏を頼って伊豆へ逃れていった時点で新しく駿河の支配者となつた武田信玄に臣従し、岡部の家を維持しているのである。

では、その岡部丹波守とは、具体的にいかなる人物だったのであろうか。岡部丹波守の履歴を総論的に、しかも、端的にまとめている文章があるので、まずそれを紹介しておこう。江戸時代の儒学者・兵学者として有名な山鹿素行の編纂した『武家事紀』という本に、つぎのような記述がある。

天正九年

三月廿三日、家康公高天神城を陥し、その首を安土に贈る。高天神、武田勝頼後責叶わざるに付、番手の兵岡部丹波守を初として皆戦死す。

岡部は元今川の家臣也。義元討死の時、尾・三の境目の諸城皆明け渡す。此の丹波守、その頃は五郎兵衛と号し、鳴海に在城して、城を渡さず。大に戦ふ。信長公その勇義を感じ、和睦を入給ひて退城。すなわち、義元の首を乞て吊葬す。此に依て氏真感書を与ふ。氏真没落の後、甲州武田に属す。此度討死。大久保彦左衛門と戦て、岡部、谷へ落たるを本多主水首を獲る。

これによつて、岡部丹波守は、永禄三年（一五六〇）五月十九日の桶狭間の戦い^{（一）}のとき、今川軍の先鋒として尾張の鳴海城に入つてゐた岡部五郎兵衛のことだつたことがわかる。そのころの名乗りは元信で、これは、主君今川義元から偏諱^{（二）}を与えられていたからである。大久保彦左衛門忠教は、『三河物語』の中で、

岡部の五郎兵衛ハ、義元打死成サレ、其ノ故、^{（三）}屏懸^{（四）}之入番衆モ落行共、成見之城ヲ持傾テ、其ノ故、^{（五）}信長ヲ引請テ、一責責ラレテ、其ノ上ニテ降参シテ城ヲ渡シ、アマツサエ信長エ申、義元之首級ヲ申請テ、駿河エ御供申テ下ケリ。

御死界ヲ取置申テ、御首級計之御供申テ下事、類スク無共、申尽シガタシ。此五郎兵衛ヲ昔之事ノゴトクニ作ナラバ、武辺ト云、侍之義理ト云、^(註)普代之主ノ奉公ト云、異国ハ知ラズ、本朝ニハ有難シ。尾張之国ヨリ東ニライテ、岡部之五郎兵衛ヲ知ラザル者ハ無と絶賛している。

なお、『武徳編年集成』は、「鳴海ノ一城ハ岡部五郎兵衛真幸堅ク守リ……」と、名乗りを真幸としている。義元の家督をついだのが今川氏真なので、義元死後、あらためて今度は氏真から偏諱を与えられ、『真』の一字をつけて真幸と改名したのかもしれない。ただ、今川氏真発給の文書でみると、五郎兵衛はそのままである。武田についてから、丹波守という受領名を与えられたのであろう。これによって、岡部丹波守はもと五郎兵衛といい、元信、真幸、長教、長保といういろに名乗りをかえていたことが明らかになったと思われる。

さて、つぎに、系譜関係であるが、『寛政重修諸家譜』によると、岡部氏の祖は駿河権守清綱が岡辺を称し、その子泰綱のとき岡部と改めたという。各種系図では、いずれも藤原武智麿の後裔で、駿河国岡部郷が苗字の地という。なお、『寛政重修諸家譜』では、岡部次郎右衛門正綱と五郎兵衛（丹波守）を、



と兄弟とするが、別家とする系図もある。たとえば岡部氏所藏系図では、

となっていて、正綱とは同族ではあるが、かなり早い段階の別れとしている。

材料があまりなく、これ以上は何ともいえないが、ただ、丹波守の子孫がのち土佐藩山内氏に仕え、伝来の文書が、「土佐国蘆簡集残篇」に収められており、そこには丹波守宛とともに和泉守宛の今川氏の文書がある。それで見ると、正綱とは別家で、和泉守系と考えることもできる。

以上、岡部丹波守について検討を加えてきたわけであるが、最後に、明らかになった点をまとめておくことにしよう。

岡部丹波守は、もともとは五郎兵衛を称し、名乗りは、はじめ元信、そして今川氏真の代になって真幸と変わり、他に、長教とか長保といった時代もあったらしい。「あつたらしい」と曖昧な表現しかできないのは、名乗り、すなわち、諱で記したたしかな文書が存在しないからである。当時は、五郎兵衛といった通称、丹波守といった受領名であらわされていたからである。少なくとも、武田氏に仕えてからは丹波守となっている。

なお、丹波守という受領名から、実際に丹波国の支配に携ったとみるむきもあるが、これは、名目的なものであり、直接的に丹波国に関係があったわけではない。岡部丹波守の場合、おそらく、武田信玄から名乗ることを許されたのであろう。戦国大名クラスだと、朝廷から正式に叙任されるが、戦国大名の家臣クラスだと、戦国大名から名乗りが許されるというのが一般的だったからである。

元信Ⅱ真幸Ⅱ長教Ⅱ長保、そして、五郎兵衛Ⅱ丹波守というわけであるが、このあと、煩雑になるので、岡部長教の名で統一しておくことにしたい。

さきに『武家事紀』を引用したように、長教は、今川家臣団の中では気骨のある部将として知られていた。桶狭間の戦いのとき、「義元死す」の報をうけて、今川氏の重臣たちはわれがちに駿河・遠江および三河のそれぞれの本領

に逃げ帰ってしまった中であつて、ただ一人、義元の首を要求し、堂々と退陣したことにも剛勇のさまがうかがわれよう。

戦国大名今川氏の滅亡にともない、長教は武田信玄に属し、駿河先方衆の一人となつた。『甲陽軍鑑』品第十七に「武田法性院信玄公御代惣人数之事」に、駿河先方衆の名前が載っているが、そこには、

一朝比奈駿河守	百五十騎
一岡部次郎右衛門	五十騎
一岡部丹波守	十騎
一三浦右馬介	四十騎
一朝比奈監物	二十騎
一三浦兵部	二十騎
一三浦右近	十騎
一小原	二十騎
一庵原弥衛門	

とみえ、長教が、一族の岡部次郎右衛門正綱とともに駿河先方衆として掌握されていたことがわかる。ただ、正綱との関係については、兄弟なのか、一族ではあるが別家の人間なのかについては明らかではない。

信玄時代、長教がどの程度の所領を与えられていたかはわからない。勝頼時代には知行宛行状があつて判明する。

『土佐国竊簡集残篇』所収文書に、

定

一 駿州石田之内 百拾六貫三百廿八文

一同 浅根松島郷 八拾六貫九百拾貳文

一同 安東之内 五拾壹貫六百四拾文

一同 澤田之内秋山名 四拾貫文

一同 後藤分 貳拾貫文

一同 麻手加戸分 拾三貫百八拾文

一同 岡清水之内 三拾貫文

一同 岩本之内 參拾貫七百元

一同 上島之内 百三拾九貫貳百八十文

合五百貳拾八貫四拾文

右、此くの如く相渡し候。畢竟先方を慕わず、忠節肝要に候。猶、戦功に依つて重恩せしむべき者也。仍つて件の如し。

天正二年^{甲辰}三月晦日 勝頼

岡部丹波守殿

とあるように、駿河国石田その他で、合わせて五二八貫四〇文の所領を宛行われていたことがわかる。

そして、長篠の戦いの後、合戦での戦死者が多く出たための所領の大幅な配置換えが行われ、長教は、今度は遠江に所領を宛行われることになった。同文書に、

定

遠州

一 青柳三ヶ郷

千百七拾參貫と百文

一同所陣夫

拾三人

同州勝間田之内

一 大沼之郷

百貳拾壹貫文

一同所陣夫

壹人

同州勝間田之内

一 布施方

廿四貫五百文

一同所陣夫

壹人

同州勝間田之内

一 麻生之郷

百八貫貳百文

同州勝間田之内

一 三栗之郷

拾壹貫五百文

一 桐山之郷

百貫文

一同所陣夫

貳人

一同所定夫

壹

一方治

貳拾貫文

已上

自今已後、別而忠節を抽んじ戦功を励むべきの旨候の条、右、此くの如く出し置き候。畢竟、先方を慕わず、逐日忠臣簡要たるべき者也。仍って件の如し。

天正五年^{丁丑}二月九日 勝頼（花押）

岡部丹波守殿

とあり、遠江の勝間田周辺において、合わせて一五五八貫三〇〇文の地が宛行われているのである。天正五年（一五七七）といえば、長教が横田基太郎尹松に替わつて高天神城の城番になる二年前のことなので、長教が高天神城に入ったときの貫高は一五〇〇貫文ぐらいだったとみてよいであろう。

